

# 小さな命の意味を考える

宮城県石巻市立大川小学校からのメッセージ

あなたの大好きな学校の

教室 廊下 校庭 体育館

風にそよいでた桜の花びら

空に向かってこいだブランコ

絵本といっしょに

バスを待っていた図書室

あの笑顔を忘れない

あの歌を忘れない

あの思い出を忘れない

あの悲しみも忘れない

「行ってきます」

あの朝の

いつもと同じ風景を

忘れない

泥だらけの教科書を

洗って干して





この一輪車で みんな練習したよね

## 小さな命の meaning を考える

——— 宮城県石巻市立大川小学校からのメッセージ ———

### 目次

はじめに .....	3
大川小学校とその周辺 .....	9
大川小学校で起こったこと〈概要と考察〉 .....	12
旧大川小学校校舎の保存・伝承を考える .....	16
メッセージ集 .....	18
小さな命がつながる LINK .....	54
スマートサイバープロジェクトについて .....	60
小さな命の meaning を考える会について .....	62

---

寄稿者の所属・肩書きは、執筆当時のものです。

# 私たちができること

西條 剛央 ● スマートサバイバープロジェクト 代表理事、早稲田大学大学院 客員准教授

私は、仙台市出身で、東日本大震災の津波で伯父を亡くしました。そうした経緯から2011年4月に「ふんばろう東日本支援プロジェクト」という支援組織を立ち上げました。後に、東日本大震災の教訓を活かして、次の震災が起きたときに一人でも多くの人の命が助かるようにするために「スマートサバイバープロジェクト」も立ち上げました。

私は「質的研究」という方法論の専門家でもあるため、「なぜあのような悲劇が起きてしまったのか真実を知りたい」という大川小学校児童のご遺族の要望を受けて、大川小学校の研究を行うことになりました。大川小学校の研究は、これほど難しい研究は経験がないというほど困難を極めました。そして世の中には「悲しい研究」というものがあることを知りました。様々な資料やインタビューから、校庭で怯えていた子ども達の姿が目につかび、またご遺族のお子さんを思う深い愛情と計り知れない悲しみが感じられて、涙が浮かんでくるのです。

2013年6月、その大川小学校の研究結果をもとにした『津波から命を守るために——大川小学校の教訓に学ぶQ&A』を刊行しました。そして、その研究のダイジェスト版は2015年3月の国連防災会議にて発表しました。

佐藤敏郎さんは、震災から1年が経とうとする頃、プロジェクトに大川出身の方がいたことからご縁をいただき出会った、大川小学校児童のご遺族のひとりです。「小さな命の意味を考える会」を立ち上げ、遺族だけではなく多くの方々と大川小で起きたことに向き合う活動を続けています。本冊子は、そうした活動の中で作成されることになったものです。「スマートサバイバープロジェクト」と共同で刊行させて頂いています。

通常、当事者であるご遺族がこうした冊子をまとめると、やむを得ないことですが（自分もそうなると思いますが）、どうしても感情や思い込みによる飛躍、視点の偏りといったものが起こりやすいものです。しかし、本冊子は——おそらく敏郎さんのフラットに未来を見据えて決しておれない姿勢だからこそ可能なのだろうと思いますが——専門家として研究した自分の目からみても極めて妥当なものであり、その洞察は適切なだけでなく、有用な示唆に溢れています。ぜひ多くの方に読んで頂ければと思っております。

「あの悲惨な出来事を肯定することは決してできないが、あれがあったからこんな風になれたと思うことはできる。それが僕らが目指すべき未来なのだ。」

これは震災後に、自分を奮い立たせるために書いた言葉ですが、今もこうした想いのもと、スマートサバイバープロジェクトの特別講師として講演活動を行って頂くことになった敏郎さんや、プロジェクトの有志とともに活動を続けているところです。

小さな命の意味を考える会とスマートサバイバープロジェクトの活動を応援したいという方は、ご支援頂ければ大変有り難いです（本冊子61、63ページをご覧ください）。

(2017.8)

# 未来をひらく

佐藤 敏郎 ● 小さな命の意味を考える会 代表、スマートサバイバープロジェクト 特別講師

平成23年3月11日の大震災で、石巻市立大川小学校では全校108名中、74名の児童が死亡あるいは行方不明となりました。教員も10名が亡くなっています。

108名といっても当日欠席、早退、保護者が引き取りに来た児童がおり、最終的に校庭にいた児童は70数名で、4名だけが奇跡的に助かりました。教職員も助かったのは1名だけです。

学校管理下で、このような犠牲を出したのは大川小学校以外にありません。大川小より海に近い学校はもちろん、もっと海から遠い、上流の学校や保育所も逃げています。



震度6強というそれまで体験したことのない強い揺れが3分も続いた後、大津波警報が発令され、防災無線やラジオ、市の広報車がさかんに避難を呼びかけていました。その情報は、校庭にも伝わっていて、子どもたちも聞いていました。

体育館裏の山はゆるやかな傾斜で、椎茸栽培の体験学習も行われていた場所です。迎えに行った保護者も「ラジオで津波が来ると言っている。あの山に逃げて」と、進言しています。スクールバスも待機していました。そして「山に逃げっぺ」と訴える子ども達。

校庭で動かずにいる間に、津波は川を約4km遡り、堤防を超えて大川小を飲みこみました。15時37分、地震発生から51分、警報発令からでも45分の時間がありました。

子ども達が移動を開始したのはその1分前、移動した距離は先頭の子どものみで150mほどです。なぜか山ではなく、川に向かっています。ルートも、狭い民家の裏を通っています。しかも、そのまま進めば行き止まりの道です。時間的に、最初の波で堤防から水があふれた後の移動開始です。津波が来たのでパニックになったと言えます。

時間も情報も手段もあったのに救えなかった、危機感を感じていながら「逃げろ」と強く言えなかったのはどうしてかを議論しなければなりません。どうして組織が機能しなかったのかです。あの日から、自分自身に言い聞かせている、重い重い言葉です。

守るべき命、しかも守ることが可能だった命を守れなかった事実から目を背けてはいけません。警報が鳴り響く寒空の下、校庭でじっと指示を待っていた子どもたちに耳を澄まし、目を凝らせば、方向性は見えてくるはずで

誰も悪意をもっていただけではありません。でも、救えなかった、それはなぜかを、先生方のために

もきちんと考察したいと思っています。先生方は、黒い波を見た瞬間「ああ、〇〇すればよかった」と後悔したはずで、その後悔を無駄にしてはいけません。学校という組織が本来の目的に向かうための議論につなげていくつもりです。

学校だけではなく、私たちの周りには様々な概念、価値観、システムを見直すことは、東日本大震災で、現代社会が突きつけられた宿題のような気がします。その宿題は、情報や物が氾濫する一方で、多忙感、閉塞感が蔓延し、本質的な豊かさが失われつつある我が国の方向性にも影響を与えるほどの意義をもつように思います。子ども達の命を真ん中にして、誠意をもって向き合えば、はじめはかみ合わなくても必ず方向性は見えてくると私は今も信じています。

現在、私たちは、関心をもってくださいしている方々と、「組織の意思決定のあり方」「命の大切さ」「命を預かる意味」「心のケア」などをテーマとしたワークショップや、授業づくりに取り組んでいます。

東日本大震災では多くの尊い命が犠牲になりました。その命に意味づけをするのは、生かされた私たちの役割です。

大川小の校歌には「未来を<sup>ひら</sup>く」というタイトルがつけられています。

大川小学校は、始まりの地です。もう一度、命の大切さやよりよい学校のあり方を確かめる場所であるべきです。小さな命たちが、未来のための大切な意味を持たたとき、私たちの向かう方向で、あの子どもたちがニコニコ笑っている気がします。

震災から4年になりますが、国内外の多くの皆様が我が事として考え、祈り、そして応援してくださいます。報道や、学者の方々からも貴重なご意見をいただいています。ほんとうにありがたいことです。これからもどうぞよろしく願いいたします。

(2015.3.14 第3回国連防災世界会議にて)

## 【追記：大川小津波事故訴訟について】

文科省が主導した検証委員会（2013年2月～14年3月）は、踏み込んだ議論がほとんどないまま終了。23名の遺族は14年3月10日、時効の前日に提訴し、県・市の法的責任を問うことになりました。

一審では、主に津波当日の教職員の判断・行動が問われ、原告勝訴（2016年10月26日）。県・市はすぐに控訴し、問われるべきは当日のことだけではないとする原告側も控訴しました。

控訴審で問われたのは事前の備えです。最低限すべきことを怠った学校と教育委員会の責任が明らかになり、控訴審も原告の勝訴（2018年4月26日）。判決文は340ページにも及びました。

教育行政に求められるのは形だけの取組ではなく、教師が「子どもの輝く命」にまっすぐ向き合える環境づくりだと思います。判決は終わりではなく、スタートラインです。

※詳しくはWEBサイトをご覧ください。 311chiisanainochi.org/?page\_id=2742

(2018.5.1)

# 四年

鈴木 典行 ● 大川伝承の会 代表

東日本大震災の大津波で多くの命が失われ、その中に大川小学校の子供たち、そして我が宝である我が子までも失った。そんな事実と向かい合っ来てもう四年になりました。

四年が経過して変化したことは、

- 生活スタイルが変わった。(生活環境や家庭内環境) 良くも悪くも。
- 人との接触の仕方が変わった。(被災者同士の絆は深いと感じる)
- 被災地の復興状況 等々

そんな生活環境の中での変化は確実にあるのですが、心の中の復興というのは全然進むこともなく、変わるものも無い、といった感じです。

「時間の経過が心を癒してくれる」ということもありますが、我が子を、家族を失った悲しい思いは簡単に癒されるものではありませんね。

毎日の親子のスキンシップがピタッとあの日でストップ。

朝出かけるときのタッチ。寝るときにおやすみのタッチ。

3月11日朝のタッチが最後のスキンシップ。

そして、おはよう・行ってきます・行ってらっしゃい・ただいま・おかえり・おやすみのあいさつ。

未だに思い出せば悔しくなるし悲しくもなる。そして涙する。

いつまで泣いてるんだ、などという人もいないでしょう。いっぱい泣いても良いと思えます。何も隠すこともないし隠れることもない。いっぱい泣いて良いと私は思います。

だから、そんな悔しい思いを伝えていかなければなりません。

## 「あの時、何が起きたのか？」

地震発生で津波襲来！

そうじゃないんだ。地震と津波のことではない

その時、何をしなければならなかったのか？

その時、何をしようとしていたのか？

(何を考えていたのか？)

その時、何をしていたのか？

子供たちは決められた通りに先生の指示に従い校庭で待機していた。



先生に逆らって逃げる子供はいなかった。  
みんな良い子だった。  
これが検証委員会では答えを出すことが出来なかった。

いろんなことを考えていると自己を責めるようになってくる。  
迎えに行けば良かった。  
迎えに行かなかった自分が悪いんだ。 などと。

今更、何かができるわけではないが、目をつむって見ると自分が子供を迎えに行ってきたくさんの子供たちを避難させている自分が見えてくる。  
それで全員無事に助かった  
でも現実にならない妄想であることに気づくと、助けるために何をしなければならないのか？と考えるようになる。  
いつもこんな過去をつくり妄想している

## バカなオヤジのたわ言

2015年はバクトゥザフューチャーの舞台。それが現実に可能になるのであれば、あの日あの時間に戻って全員を助けたい。未来を変えたい。

ドラえもんがここに来てくれるのであればすぐにでも来て欲しい。  
タイムマシンであの日あの時間に戻りたい。そしてどこでもドアで避難させたい。  
ドラえもんは2112年生まれ。

その時になってからでも良いので助けに行きたくて欲しい。あと97年。  
そうすると、孫の子供 あるいは 孫の孫まで正確に伝えて行かなければならない。  
言葉の伝え方もあるが、正確に残せるもので伝えていきたいですね。

## 「未来へ伝えていかなければならない」

- ①何を伝えていくのか？
- ②何を教訓としていくのか？
- ③検証委員会の24の提言か？
- ④どのように伝えるのか？

教科書か？ 副読本か？ 祈念碑へ刻むか？

何に残すにしろ、未来予想図みたいな未来へ投げかけるものが必要である。

「今後の防災」って形でいろんな方々がいろんなことを話していますが、理想論だけではなく、現実に目を向け、身に感じるものがあって語っていただきたい。

それで、子供たちへの教育で意識付け。などというのも出ていますが違うと思う。

子供たちへ教育する前に、その教育をする教員への教育が重要である。そのことに触れている話を聞かない。理想論だけで「子供への教育」とか言うのは大人の自己満足な話。教育する者がしっかりと教育を受けていなければ教育できない。勉学と同様である。



また、伝えるにあたりしっかりとした想いをもって伝えなければ、ただの読み聞かせになる。

実際の被災地へ行っての実習であったり、これから発生するであろう南海トラフを想定し兵庫県や和歌山県そして四国地方などに行って、現在の防災のあり方で不備なところなどを学んできたほうが良い。

大学を卒業して教員免許取って配属が決まると思うが、配属前に数ヶ月間はそのような研修が必要と感じる。

大学では学ばないことを通して教員として必要なスキルを身につけるべきである。

## 防災管理の充実

学校としてどのような防災減災活動をしていくのかは重要である。

各学校では様々なことを想定して訓練をしていると思うが、訓練しているだけで終わればそれでよし、やったからよし、になっていないか？

それではよくなる。PDCAを回す事の意味を理解していない。

実施したら、チェック➡アクションで次にもっと良くするために新しいプランが出来る。

危機管理マニュアルは誰が作成しているのか？ これも納得いかないことばかり。

学校周辺のことや地域のことよくわからない先生たちが作成し承認されている。

何の役に立つのか？

マニュアルは学校の先生方で作成するのはもっともだが、それを学校周辺や地域のことを知っている方々の意見を取り入れなければ良いものにならない。

マニュアルについては全教職員とPTA役員で作り上げ、PTAの全体会でそれを保護者に周知しなければならない。

.....

語り出せば切りがありません。

悲しみの中で、自分たちにいったい何ができるのか、迷い、悩みながら四年が過ぎました。

いつも私たちを支えてくださっている全国の皆様には、ほんとうに感謝しています。

どうか、あの子たちの命を心のどこかに覚えていてください、いつまでも。

(2015.3)

## 宮城県石巻市立大川小学校

1873 (明治6) 年 桃生郡釜谷ものう かまや小学校として開校

1985 (昭和60) 年 大川第一小学校と大川第二小学校が合併して  
大川小学校となり、現在残されている校舎が完成

2011 (平成23) 年 3月11日 東日本大震災の津波で被災

2018 (平成30) 年 3月 閉校の予定

**3.8 km**

海から大川小までの距離

**1.1 m**

大川小の海拔



校門脇にあった碑、  
海拔1m12とある▶

**108 名**

当時の全校児童数  
(校庭にいたのは77~8名と  
言われている)

**74 名**

犠牲になった児童数  
(死亡70、行方不明4)

**9 度**

毎年3月にシイタケ栽培の  
体験学習を行っていた  
大川小裏山の傾斜



**10 名**

犠牲になった教職員数  
(校庭にいた11人中)

**51 分**

14:46 (地震発生) から  
15:37 (津波到達) までの時間

津波で止まった時計▶



**1 分**

津波から避難した時間  
山ではなく川に向かった



**8.6 m**

大川小を襲った津波の高さ  
(海拔9.7m)

◀2階教室の天井に  
津波の跡がある

**150 m**

先頭の子が  
避難開始から移動した距離



**おっば 追波運動公園**  
自衛隊の活動拠点になった。野球場などは仮設団地になっている。



**大川中学校**は25年3月に閉校。跡地が野菜工場、ソーラー発電所になった。(良葉東部)



川向の町・飯野川の**河北総合センター(ビックバン)**は避難所になった。元々多目的に活用できる施設ということもあり、避難所としても機能的であった。



**路側帯**は大川中の生徒が登下校で使う自転車道路。大川中が閉校した今、ここを通る中学生の姿はない。そこで生活する人も風景なのだ。



山の上の石巻北高校飯野川校の体育館は**遺体安置所**…。学校の体育館は避難所か安置所になった。



**間垣地区**  
大川中から新北上大橋のたもとまで堤防が決壊した。立ち並んでいた家はほとんど残らなかった。



**福地閘門**を閉めたので、福地地区には津波が到達しなかった。小学生だけが、8人中6人亡くなった。この閘門より下流方面は、3月11日はたくさんの人が民家やビニールハウスで泊まった。



**新北上大橋**  
1976年に完成、全長567m。津波で橋の約4分の1が流失。



**谷地地区**は水が入り込み、富士沼とつながり、湖ようになった。



**三角地帯** 子どもの遺体が並べられていた。橋がダムのようになり、信号機より高い波が襲った。





校 門



震災後、自然に祭壇になった。  
(現在校門は、  
校庭に作られた慰霊碑の場所に移動)

アセンブリ  
ホール  
(多目的室)



集会や作品展示などが行われていた。  
ボランティアの方が ツリーなど  
イルミネーションを飾っている。

教 室



半分に机が並べられ、  
半分はワーク・展示スペースとして  
広々と使っていた。(1階は1・2年生)

中 庭



一輪車で遊んだり、  
お花見をしたりいろいろな活動をしていた。  
大川小のほとんどの子たちは一輪車に乗れる。

渡り廊下



海側へ倒れていて、  
川から巨大な波が襲ったことを示している。  
ガラス張りでモダンな作りだった。

体 育 館



ステージの両脇と、  
出入り口だけが残った。

野外ステージ



コンクリートの反響板は倒れている。  
壁画にある「未来を拓く」は大川小の校歌のタイトル。  
隣に相撲場もあった。

## 2011年3月11日 午後2時46分から3時37分までの動き

### 1 子どもを救う方法は十分あった。

体育館裏の山は傾斜が緩く、低学年でも登れる。椎茸栽培の体験学習も行われていた。5分あれば入釜谷方面への避難も可能。スクールバスには会社から「子どもを乗せて避難」という無線が入り、すぐ出られるように待機していた。地震から津波到達までは51分。地震による倒木はない。

### 2 地震発生後、校庭に避難し点呼。津波が来るまで校庭待機。

子ども達は不安がっていたが、校庭ではたき火の準備も始まっており、避難する雰囲気ではなかった。たき火のための缶は少なくとも二つ用意されていた。早い段階で校庭にとどまる決定をしたことがうかがえる。もしくは話し合いが十分なされなかったのかもしれない。引き渡しの対応に追われていたわけではない（人数的にも多くない）。

### 3 移動時間は数十秒。民家裏の細道を通り、津波が来るのに川に向かっていく。

校庭から移動を開始したのは大津波がいよいよ迫って、川からはすでに水があふれていた時である。一応上級生が先頭となっているが、整列する余裕などなく、列は乱れており、学年は入り交じっていた。

「三角地帯へ移動」という指示で移動開始。「もう津波が来ているから、急いで」と言われ、児童の列は自転車小屋の脇から出て、裏道の方に進んだ。行き止まりに突きあたったので、民家の軒先を通り、県道に出ようとしたら川から波が来た。児童が追い込まれたのは、最も狭く、山の斜面も急な場所である。

3時35分に車で家を出た近くの人が学校前の県道を通ったとき、児童は道路に出ていない。校庭から移動した距離と時間は先頭の子で約150m、1分ほど。

### 4 避難可能な情報は十分あった。

遅くとも3時前後には、ここまで津波がくるだろうという情報があった。大丈夫だろうという意見もあったが、早い段階で裏山への避難を進言した子ども、教員、地区の人、迎えに来た保護者がいる。指揮台の上にあったラジオも盛んに大津波警報、高台への避難を連呼していた。市広報車は3時25分に高台避難を呼びかけ釜谷を通過している。



『津波から命を守るために——大川小学校の教訓に学ぶQ&A』より（一部改変）

※詳しくは、小さな命の意味を考える会HPをご覧ください。 <http://311chiisanainochi.org/wp/>

**14:46 地震発生**  
体験したことのない強い揺れ

**14:52 大津波警報**  
かつてない緊迫した警報

**15:37**  
**津波到達**

### A 体育館裏の山

平成21年まで毎年3月にシイタケ栽培の体験学習が行われていた。傾斜は9°。



▲マラソン大会コースのすぐ脇、全校児童・教員全員が知っている。

◀毎年行われていたシイタケ栽培の体験学習。



◀海側からの写真。  
★はシイタケ栽培で登っていた位置。  
★はBの写真で登っていた位置○。  
青線—は津波の高さ。

### B 校庭脇の山

崩れないように土留め工事が施されている。低学年の授業でも登っている。



▲登ったところ★は幅4mほどのコンクリートのたたきになっている。青線—は津波の高さ



◀山の上での授業の様子。(「学級だより」より)

※この他、アオダモの木を植樹した「バットの森」の山が、徒歩5分ほどのところにある。

**広報車、防災無線**  
「津波が来ます、高台へ」

**ラジオ 指揮台の上**

**先生 地区民**

迎えに来た**保護者**  
「津波が来る、逃げて」

**スクールバス**  
会社から無線で避難指示  
方向転換し待機

**子どもたち**  
「ここにいたら死ぬ」  
「山さ逃げっぺ」

**時間はあった 助かる手段は全員が知っていた**  
**大津波警報は全員に伝わっていた**

**なぜ50分間校庭にとどまったのか**  
子どもを守る組織として機能できなかった

## 二転三転の説明

石巻市教育委員会の説明は矛盾が多く、二転三転しています。文科省が立ち上げた第三者検証委員会も、途中で事実解明を放棄した形で、2014年3月に終了しました。説明を聞く度に、あの日の校庭が、子どもたちの命が、どんどん遠ざかっていく気がしました。二つだけ例をあげます。

### 「引き渡し中に津波」

**2011. 3.16** 校長が市教委へ報告 (校長は、震災当日は不在だった)

**2011. 4. 9** 最初の説明会

市教委は「地震でバキバキと木が倒れ、山へ避難できなかった」と説明。地震による倒木は1本もありません。

**2011. 6. 4** 2回目の説明会

5月に行った聞き取り調査をもとに説明。倒木は「あったように見えた」に訂正、避難開始は津波の12分前と説明。時間だからと途中で打ち切り。取材には「遺族は納得」「説明会はこれで最後」と答える。

※聞き取りのメモ等、資料はその後すべて廃棄

**2012. 5月** 2011.3.16の報告書が判明

「引き渡し中に津波」とあります。「倒木」の記載はありません。震災間もない頃に、ほとんど避難していないことが分かっていたのです。

この報告書の存在も、2012年5月に指摘を受けるまで明らかにされませんでした。

引き渡し中に津波

**2011. 3.16**

校長が市教委へ報告  
(2012年5月に存在が判明)

このような報告がありながら  
「12分前に避難開始」と説明

### 「山さ逃げよう」

これは2回目の説明会の読み原稿です(2011年6月4日)。子どもたちの証言をもとに作成。この時点で市教委は、山への避難を訴えた子どもの存在を認めています。

ところが、報告書には記載されず、聞き取り調査のメモは一斉に廃棄されました。複数の児童が聞き取り調査で証言したと話していますが、市教委はそのような証言はなかったと言います。聞き取り時の資料がないので、いつの間にか曖昧になり、説明が二転三転します。検証委員会でも進展しませんでした。

あの日山への避難を訴えた子ども、そして、亡くなった友だちのことを一生懸命話した子ども達の言葉はなかったことにされたままです。

防災無線のサイレンがなって、「大津波警報が出ました。海岸沿いは危険ですので高台に避難してください」という声を聞いた。それを聞いて、「ここって海岸沿いな」という女子や「山さ逃げよう」とかいう男子がいたが、そのまま引き渡しを続けた。先生

〈2012.3月〉  
市教委としては  
押さえていない

〈2012.7月〉  
「ここって海沿いな」という  
女子と書くと「山さ逃げよう」  
とかいう男子と書きたくなる

〈2012.8月〉  
子どもの記憶  
は変わるもの

〈2012.9月〉  
「山に逃げよう」とい  
う子どもがいたかどう  
かは重要ではない

〈2014.1月〉  
子どもではなく、  
保護者に聞いた  
のかもしれない

こうした矛盾点をあげればきりがありません。

矛盾点の指摘とその言い訳の繰り返しで、核心的な議論になかなか進みません。

つらく悲しい出来事ですが、だからといって目を背けないでほしいのです。ましてやごまかしてはいけません。

どうすれば、子どもの命にしっかり向き合った話し合いができるのか、模索しています。



## 同音異義語

去年の今頃  
寒い日



「法要」と入力したつもりが  
「抱擁」と変換された



同じ読みだったのか



2014.1.19

## みんな来てるよ

雪がちらついて  
冷たい風が吹いて  
みんなでしゃがんでいたあのあたりに  
みんな来てるよ

2014.3.11



## 旧大川小学校校舎について

2016年3月、校舎の保存が決まりました。これから、何をどう伝えていくか、小さな命の意味を考える会では次のようなスタンスで伝承を考えています。



### 1 検討するにあたって

東日本大震災は、広い範囲を津波が襲いましたが、あれだけの規模でその痕跡をとどめている場所はもう大川小以外にないと言っていいでしょう。

#### ①向き合いにくさ

震災遺構の保存、伝承については、地域ごとの様々な状況をふまえた十分な検討が必要だと考えます。とりわけ、大川小学校についてはいろいろな事情が絡んで、なかなか向き合いにくい状況にあり、これまで市の遺構検討委員会でも検討の対象から外されてきました。このことが大きな特徴です。学校管理下で過去最大の犠牲者を出してしまった事実はけっして忘れてはいけないと同時に、最もなかったことにしたい事実でもあります。あれが夢だとしたらどんなにいいでしょう。誰もが思っています。

だから、これまで対話が不足して、他の伝承と比べてビクビク、コソコソ進められている印象になっています。そうした中で、中高生が勇気をもって意見を発表したことは特筆されます。

あの日までの、きれいな校舎、子ども達の笑顔や歌声を、覚えていてほしいです。あの日まで、楽しく学び遊んでいた命が、たしかにあったのです。

そして、そんな学校の管理下で多くの子どもの命が失われてしまったということ。

守るべき、守ってほしかった、守れたはずの命です。どんなに寒かったか、どんなに怖かったか、どんなに生きていたかったか…。そんな命があったことを、一緒に黒い波に飲まれた先生方の無念さとともに、忘れることなく、しっかり語り継いでいかなければなりません。

#### ②伝承の方向性

前例のない大惨事の後は、前例のない悲しみ、前例のない事後対応が続いています。ですから、大川小は前例のない震災遺構となっています。特に誰かがPRしているわけではありませんが、国内外から、大川小を訪れる人はどんどん増えていて、5年以上経っても、なんの表示もガイドブックもないにもかかわらず、年間数万人の人々があの地に立っています。最近では、スポーツ選手、芸術家、あるいはその道を目指す若者も多く訪れるようになりました。

管理人もいない、吹きさらしの校舎。でも、校庭にはゴミも落ちていないし、床もきれいに掃除されています。こんな場所になるなんて、少なくとも私は想像していませんでした。ある意味驚くべきことだと思います。

同時に、誰も検討しなくても方向性は示されているのだと思います。

ですから、震災遺構としてあの場所をどう遺すのかは、さほど難しくありません。基本的には極力手を加えない、ということです。順路や以前の写真等を掲示するプレートを設置し、危険箇所を補強する程度で十分です。植樹などは最低限にとどめた方がいいでしょう。

もちろん、きれいに整備して、芝生や花のスペースも上手にレイアウトする部分もあっていいと思いますが、メインは現状をありのまま遺すスタイルでいいと思います。

南三陸の防災庁舎や門脇小校舎と違って、周囲に町ができるわけではないので、わりと自由にイメージできます。

あとは、遺族や関係者が静かに祈れる環境整備です。

外部から多くの人を訪れることで、学校に足を向けにくいという声が多く聞かれます。語り部をしている遺族にとってもそれは同じです。

そうした想いにどう配慮すべきか。遺族の想いや事情はほんとうに様々です。それを吸い上げ対話する形がずっと出来てこなかったこともあり、当事者同士も分かりません。

訪れる方々にきちんと説明をし、どういう場所なのかをしっかりと認識をもってもらうのが最も重要ではないでしょうか。メディアの役割も大切です。

遺族の想いは十分配慮すべきですが、大川小校舎は遺族だけのものではないし、むしろ、遠くの人、未来の人にとっての意義を考えるべきだと思います。今回保存となったのは、みんなでそのことを考えようということなのです。壊してしまったら議論できないし、保存・解体は未来の人が決めてもいいのですから。内外の若い世代の声を反映させる体制づくりも必要でしょう。

私たちがガイドするときは、3.11の様子も説明しますが、震災前の校舎や風景、子ども達の様子もイメージしてもらうようにしています。

子どもと先生が、地域の方々に見守られて、笑顔で通っていたことが実感できれば、なぜこうなったんだろう、自分はこれからどうしていけばいいだろうと考えてくれると思うのです。訪れた一人一人にとって意味をもつことが大事です。

## 2 何を伝えるか

「未来を拓く」大川小学校の校歌のタイトルです。ここは悲しいことが起きた場所ですが、未来を拓く何かが始まる場所になってほしいと願っています。次の4点をバランスよく伝えなければなりません。

### ①あの日までのこと

ここはあの日まで、楽しく学び遊んでいた学校だということ。  
地域の人に見守られて過ごしたたくさんの思い出。  
あの日までの風景、町、命。



### ②あの日のこと

午後2時46分の強く長い揺れの後、3時37分に巨大な津波が襲うまでの事実。  
時間、情報、手段、救える条件があったにもかかわらず、動けなかったこと。  
何があったのか事実に基づいた考察。  
海から4km近く離れている場所を襲った巨大津波の様子とメカニズム。



### ③あの日からのこと

地域から多くの子どもたちの姿が消えたこと。悲しみ、喪失感。無駄にしてはいけないという取り組みとその難しさ。  
保存決定に至るまでの経緯（簡単に保存を決めたわけではないこと、卒業生をはじめ様々な意見があったこと、なかなか議論を進められなかった事情）。



### ④これからのこと

この場所をどう遺し、伝えていくかを対話を通して考える。  
一人一人がこれからの進む方向性を考える。  
失われた命に想いを馳せ、祈り、誓う。

# 世界との再結合

桑山 紀彦 ● 心療内科医、NPO 法人「地球のステージ」代表理事

宮城県名取市の自分のクリニックが被災してから、この4年間で511名の被災した方を新患で診てきました。しかし、四角い診察室でできることには限りがあり、もともと国際協力を専門にしてきたこともあり、(認定) NPO 法人「地球のステージ」の活動として「心理社会的ケア」を行ってきました。

これは世界では既に主流である心のケアモデルですが、日本にはまだなじみの少ないものです。しかしとても日本人の思考に添っています。それは「作品を創り出すことで、心のケアを遂げていく」という内容だからです。日本人はもの作りにおいてとても長けています。



大川小学校のご遺族の皆さんと接しながら思うことは、何人かの皆さんが向き合おうとされており、そこから想像力が刺激されて、少しでも前向きになろうと努力する姿に触れることができたことです。

「小さいのちの意味を考える会」の代表、佐藤敏郎さんはまさにその先駆者です。

心のケアの最終段階、第三段階は「世界との再結合」です。心の傷を受けて、自分たちだけがこんな思いを抱え、世界の中でマイノリティ（少数派）になってしまったような気持ちを吹き飛ばし、実は自分たちが世界を変える力を持った存在なのだ気づくことにより、この「世界との再結合」が完結します。

津波で受けた経験を昇華させ、世の中や学校現場のためになっているという思いを持つことで、ご遺族の皆さんの心のケアは一つの到達点を迎える。そのために今必要なことは、真実を語るものがたくさん出てきて、世の中に一定の理解という合意点が得られ、辛かった経験を社会が未来に向かって利用しようという意志を見せることです。

大川小学校の出来事は、日本人全ての、いや人類全ての意識を変革させる力を秘めています。ぜひ、ご遺族の皆さんの一言一言に耳を傾け、その目指すものに共感して共に歩いて行こうという意志を表明することが大切だと思います。

今、それを表明する時期です。

私は、心のケアの専門家としてこの「世界との再結合」を見届けたいと思っています。

(2015.3)

# 語りを持つ二つの意味

## ～社会的な語りと個人的な語り～

諏訪 清二 ● 兵庫県立松陽高等学校 教諭 (元兵庫県立舞子高校環境防災科科長・現防災学習アドバイザー・コラボレーター)

私は、東日本大震災発生からちょうど半年後、NHKクローアップ現代「あの時何が？ 巨大津波石巻大川小の悲劇」で次のように発言しました。

まず事実を一つひとつ集めること。すべての事実が集まるわけではないし、食い違いもあると思うんだけど、できるだけたくさん事実を集めて、そしてきちんと検証をして、そして、どこが間違っていたのかということを知るみに出すことだと思うんですね。

その事実をできるだけ一つひとつ集めてきちんと知ること、子どもが最後どう生きていて、そしてどう津波に巻き込まれたか、それを知ることが子どもの生を見つめることになり、そしてとてもつらいですけども、子どもの死を見つめることになると思うんですね。

この発言には二つの意味が含まれています。

行政や防災の専門家、マスコミ、未災地にいる人々は、社会の防災力の向上につながる語りを期待します。被災者が語る体験談には、災害の知識の不足と不十分な備え、発生時の対応の拙さなどが含まれており、その事実から得られた教訓を活用して社会の防災力を高め、次の災害で被害を減らそうとするわけです。「同じ過ちを繰り返さない」という言葉は、災害の後、必ずといっていいほど防災関係者が口にする言葉です。

大川小学校を語り継ぐことは、「同じ過ちを繰り返さない」ために必要なのです。

でも、大川小学校は社会の防災力を高めるための道具ではありません。私はもっと個人的な語りがあると思うのです。

阪神・淡路大震災の被災地で、語り部を続ける女性はこう言います。

自分は、小学生で亡くなった娘がかわいそうだ、いろいろとやりたいことがあったろうに、それが突然奪い去られてかわいそうだと言ってきました。でも、10年経ってふと思ったんです。私が語りたかったのは、娘を亡くした私がかわいそうだということだったんだと。

辛い体験をした人はその体験を語ることで災害と向き合い、その意味を考え、心の中に飲み込んでいこうとするのではないのでしょうか。しかもそれは時間のかかる作業です。し

かし、この過程こそが、被災者が災害体験を語る最も大切な意味だと思います。

個人的な語りこそが災害の真実を伝えます。その苦痛に満ちた作業は社会の防災力の向上ではなく、まず自分のためにあるのです。

私たちはそのことを忘れてはならないと思います。

(2015.3)

(2017年現在：防災学習アドバイザー・コラボレーター)



# 大川小学校で起きたことから 科学者が学ぶべきこと

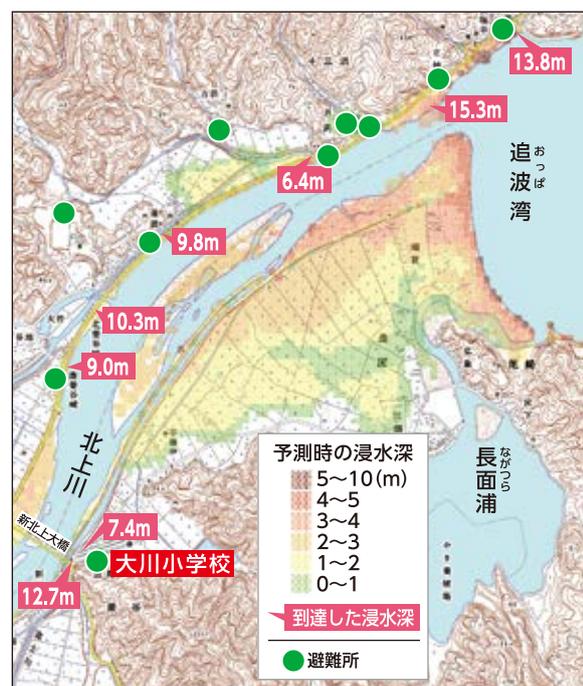
こしげつ 縦縞 一起 ● 東京大学地震研究所 教授

大川小学校で多数の児童・教職員が死亡・行方不明となった要因に関して事故検証委員会報告書（以下、報告書）は「避難開始に関する意思決定の時期が遅かったこと、及びその時期の避難であるにもかかわらず避難先として同校より標高は高いものの河川堤防に近い三角地帯を選択したことが、最大の直接的な要因である」と結論づけた。そして、その遅れの分析結果のひとつとして「過去に津波が来襲した記録がないことに加え、大川小学校がハザードマップの予想浸水域外になっており、津波災害時の指定避難所になっている」点が影響したと推定した。

石巻市の当時の津波ハザードマップは、宮城県防災会議地震対策等専門部会が04年に連動型宮城県沖地震を想定して作成したものをほぼそのまま踏襲していた。図の中でいろいろな色で塗りつぶされた部分が、想定地震による津波浸水が予想されている領域である。こげ茶色の5m以上から緑色の1m未満まで6段階で表されており、左下の大川小学校はこの領域から外れているだけでなく、それをもって津波災害時の避難所に指定されていることが見て取れる。

また、1933年の昭和三陸津波の浸水域も大川小学校には及んでいない。この大津波を上回るものとして知られている1896年の明治三陸津波では図面は残っていないものの、宮城県海嘯誌という公文書に「大川村は追波の河口に臨み又其湾に面し居るも沿海民家少なかりしを以て流失家屋僅かに一戸死亡亦一人に止まれり」（大川村は当時の河岸南側の名称）と書かれている。これだけでは大川小学校に明治三陸津波が及ばなかったとは言い切れないが「大川村大字長面は海岸には凡十町餘の距離あるを以て市街地付近に於ては何等の被害なかりし」（十町は約1km）の記述と併せると報告書の通り「過去に津波が来襲した記録がない」となる。

図で示した東日本大震災時の津波の浸水高と比較すると、ハザードマップの推定がいかにも過小評価がよくわかるが、ここに科学に関わる問題が潜んでいる。ハザードマップが作られた前述の地震対策等専門部会による第三次地震被害想定では、国の地震調査委員会が発生確率の長



宮城県津波ハザードマップ（津波浸水予測図）と東日本大震災時に津波が到達した浸水深

期評価を発表していた地震のうち、もっとも確率が高く規模が大きい、マグニチュード（M）8連動型宮城県沖地震が想定地震として採用された。採用にあたっては、専門部会に参加していた数名の科学者も、科学的に妥当だと判断して同意したはずである。

ところが実際に地震が起こってみればマグニチュード（M）9の超巨大地震で、予想を絶する巨大津波となってしまったのである。直後に当時の阿部勝征・地震調査委員長が「4つの想定域が連動するとは想定できなかった。地震研究の限界だ」（正しくは4つではなく6つ）と述べたように、過小評価のハザードマップの背後には科学の想定外があった。地震の科学は依然として経験科学の域を出ず、東日本大地震災のような未経験の事象を事前に想定することは困難な状況にある。

では科学者はどうしたらいいのか？ 報告書にはピント外れな提言しか書かれていない。未経験の地震を事前に想定してハザードマップを作成するという課題は、科学の「限界」への挑戦とも言える重い課題であり、その解決には長い道のりが必要である。しかし、地震国日本は、それでも地震災害の軽減のためにハザードマップを作らなければならないという状況にある。

そうした状況の中で科学者はどうすべきなのか。たとえば、科学者の常識的な感覚から導かれる平均的な想定地震だけでなく、情報・知見などを総動員して最大規模の地震を想定し、それを提示する必要があるだろう。東日本大震災以前のM8連動型宮城県沖地震は規模が大きなものとして選ばれたのであろうが、結果的に「平均的」な想定地震に過ぎなかった。今後必要となるのは、未経験な状態で東日本大震災のような「最大規模」の地震を想定することである。

そして、「平均的」や「最大規模」など、複数の想定地震ごとに提示されるハザードマップの中からどれを選ぶか、あるいはどう組み合わせるかなど、減災に向けた活用の仕方は科学者が決めるべきことではない。行政あるいは住民が直接、科学以外の要素（経済的・社会的状況など）も勘案して決めるべきことである。特に、避難所や避難場所の選定はそれ自体が重大であるだけでなく、大川小や、ここでは触れなかったが東松島・野蒜小の場合のように人々の避難行動に大きな心理的影響を与えるから、慎重な決断が必要である。

(2015.3 / FACTA 2014年5月号の拙文から抜粋しました)



# 大川小事故とその検証に学ぶ

林 衛 ● 富山大学人間発達科学部 准教授

2011年の東日本大震災から4年が経過した。しかし、石巻市立大川小学校での被災原因の「検証」と「共有」はまだ途上にある。誰のため何のための学校、検証なのだろうか。

2011年2月の大川小事故検証委員会報告書提出後、毎月のように地球惑星科学、理科教育、災害復興、科学技術社会論の学会や研究会、教員研修の場で、検証の問題点について話題提供し、参加者と意見交換を続けてきた。大学の授業やゼミでも学生たちとの議論がある。それらのなかで何度も耳にしたのが、「事故原因の検証はむずかしい問題ですね」という指摘である。

大川小事故検証委員会の報告書案を取りあげた2013年1月29日公開の高木克聡署名による産経新聞ネット記事「【大川小最終報告書案】遺族の「なぜ」に答えず」では、検証委側の主張を要約するかたちで、「事実を積み上げる科学的な方法による検証では、遺族の思いに応えることはできなかった」と論評している。しかし、学校が4階建てでなかったこと、裏山に階段がなかったことなどを事故原因とする検証委報告の24の提言が、大川小の事実在即し科学的に導き出された結論・教訓ではないというのも、少し考えれば誰にでもわかるだろう。検証委が科学的だったわけではない。

問題は、何が検証をむずかしくしているのかにあるのではないだろうか。どんなに調べても確認できない事項もあるだろう。したがって、調べられる事項を徹底的に調べながら、学校現場におこりうる原因を推定していく仮説・検証という科学的な方法論が不可欠だ。その際には、事故に至るありそうな（可能性が高い）過程を決して見落とさないよう心がけるのが肝心だ。

とっさの判断で避難が間に合ったほかの多くの学校でも、逆にいえば決断の遅れによって事故が生じていたかもしれない。避難に成功した学校で生じた判断、決断に至る際の逡巡は、大川小の教員集団でも生じた可能性が高い。多くの学校で生じうる判断、逡巡、決断の過程からは、再発防止のための教訓が導き出せる。これを見落としてはならないはずだが、検証がされなかった。

大川小事故検証委員会は、直接の証言にもとづく、推測を交えない原因を導き出そうとした。しかし、証言が得られず、「分からないものは、これ以上分からないと結論づけた」（室崎委員長：上記産経新聞記事から）。証言が得られなかったのは、大川小事故検証委員会の方針に問題があったからだと考えられる。大川小事故検証委員会は、聞き取り調査の際に、公的な立場の発言者であってもすべて匿名とした。その結果だろう、「忘れました。覚えていません」などと当初の証言を否定したり、あいまいにしたりした石巻市教育委員会関係者が続出している（名取市の東日本大震災検証委員会が、役職の重みよりもプライ

バシーへの配慮が証言を得る上でより重たいときに匿名とするといった基準を示していたのと大川小検証委の方針は対照的であった)。



つまり、(1) 大川小の事実在即し検証・再発防止を図る方針、(2) 匿名化・免責論以前に、組織トップに説明責任を求める姿勢、(3) 自らの方法論の限界を自覚し、見落としを避けようとする科学的態度、この三つさえ忘れられなければ、より豊かな検証が実現したのではないだろうか。

誰のため何のための教員集団なのか、根本目的に立ち返り児童の命のためにベストを尽くす議論ができていれば、山への避難の判断は、逡巡を乗り越え、決断され、実現しただろう。それだけの知見は大川小の教員集団に備わっていたのだから。大川小事故検証委員会もまた、根本目的の共有から失敗してしまっているように思えてならない。

(2015.3)



校舎のあちこちに  
名前のシール

はがれないシール  
消えない名前

# 問われているのは 学校であり、教育行政であり、専門家である

住友 剛 ● 京都精華大学人文学部 教授

学校での重大事故・事件や災害で我が子をなくしたり、重い傷を負って暮らすことになった我が子のいる親たちは、私の知る限り、ほぼ間違いなく自分を責める。

特に我が子を亡くした遺族の場合「なぜあのとき、我が子を学校に送り出したのか?」「どうしてあの時、我が子の思いに気づいてあげられなかったのか?」という思いや、あるいは「亡くなった我が子に対して、生きている私には今、何ができるのか?」という思いを抱く方も多い。そして遺族のなかには、深い苦しみと悲しみの縁から「二度と亡くなった我が子のような苦しみを、他の子どもには味わってほしくない」と強く願い、そこから立ち上がり、再発防止策の徹底した実施と、その前提となる事実経過の検証を強く学校や教育行政に要望する方も現れることになる。

ところが遺族たちが深い苦しみ、悲しみの縁からこのような要望を紡ぎだすまでの間、学校や教育行政は何をしているのか。私が見聞きしてきた多くの学校での重大事故・事件のケースでは、「一日も早い学校再開を」「平常の授業の秩序を取り戻すことを」という周囲の声に押されるかのように、なによりも最優先するかのような事後対応が行われてきた。それはまるで「起きてしまった悲しい出来事」が「なかったこと」のように、学校が「平常」に戻ることが最優先されているかのようなようである。

しかし、遺族たちは絶対にかつてのような「平常」に戻ることができない。なぜなら、そこには我が子が居ないからである。だからこそ遺族は、「一日も早い学校再開を」という声に押されるかのような事後対応に対して、強い憤りと疑問を抱くのである。あるいは、亡くなった我が子が存在

しなかったかのように扱われ、我が子の記憶が風化していくことに危機感を覚えるのである。そしてくり返しになるが、記憶の風化を防ぎ、再発防止策の徹底した実施のためにも、事実経過の検証を強く学校や教育行政に求めていくことになるのである。

とすれば、このような遺族あるいは被害者家族の強い願い、思いにどこまで寄り添って対応していくことができるのか。それが今後、重大事故・事件や災害発生時における学校・教育行政側の事後対応や、事実経過の検証や再発防止策の検討・実施における諸領域の専門家等の基本的な姿勢として求められるのではなかろうか。

今、子どもが亡くなったり、重い後遺症に苦しむような重大事故・事件や災害において、そのあり方が問われているのは学校であり、教育行政であり、私を含む専門家の側である。そして亡くなった子どもの名誉を傷つけたり、遺族や被害者家族、そして被害体験とともに暮らす子どもにより辛い思いをさせるような事後対応は、今後、くり返してはならない。

(2015.3)





## いつかの年の桜

桜がきれいに咲きました  
新学期はあたらしいときめき  
胸には新しい名札  
ランドセルに  
新しい教科書  
校庭に走っていく  
子どもたちの姿  
舞い降りる小さな花びら  
ほほえむように



# 子どもたちが残した宿題

今村 久美 ● 認定特定非営利活動法人カタリバ 代表理事

日常的な職場風土としての「対話」。  
すべての人に必要な、肩書を超えた「リーダーシップ」。  
その二つが、2011年の大川小学校の職員室に存在すれば、  
適切な「合意形成」がなされたのではないか。

大川小学校でお子様を亡くされた方々は、  
亡くなった子どもたちの思い出を取り戻したいという感情論で  
戦っているのではない。

ましてや、誰か特定の人を糾弾したいということでもない。

この停滞した社会の中で、普遍的にどこにでも存在してしまっている、  
「前例踏襲主義」「お任せ民主主義」の大人の思考停止状態に、  
そんなのもうやめよう、みんな自分の頭で常日頃から考えようよと、  
訴えていらっしゃるように、私には見える。

はじめて大川小学校の、あの日の話を聞いたとき、  
実は私も、「未曾有の震災で起きたこと。ツライ責任追及はもうやめて…」と、感じていた。  
しかし今は、ちいさな命が失われた「原因」を、  
社会の学びに変えなければいけないと、心から感じている。  
その責任が、すべての大人たちに課せられた、子どもたちからの宿題だと思う。

(2015.3)



# いかなる想定外でも失ってはならないもの

大木 聖子 ● 慶應義塾大学環境情報学部 准教授

2010年4月末、当時私が勤務していた東京大学地震研究所に、気仙沼市の中学校から5名の少年少女がやってきた。修学旅行で東京を訪れたので、地震と津波の話聞かせて欲しいという。ひと通りの説明をして、地震が起きたら高いところね、などと伝えてレクチャーを終えた。

そのたった10ヶ月後、テレビに映し出された三陸の惨状に私は言葉を失った。彼らの町は巨大津波に飲まれ、跡形も無い更地となっていた。見学に来た中学生の名前をインターネットで検索しながら、自問を繰り返した。私は、いつか君たちが津波にあった時に絶対に生き延びられるように、と思って講義をさせていただこうか。結局私だって、巨大津波が来襲することを現実的に考えていなかったのではないか。救えたはずの命を、そのチャンスを、あまりに軽率に扱っていたのではないか。自分の不甲斐なさに愕然とした。

1995年に阪神・淡路大震災が起きた時、私は高校1年生だった。テレビで見た惨状に、こんなこと二度とあってはならないと地震学者を志した。同じ年頃の子がパジャマ姿のまま瓦礫に向かって母を呼び続ける姿と、母の手料理を食べている自分——。高校生なりに責任を感じたのだと思う。

2011年3月、既に地震学者として研究や啓発活動を行ってきた私は、東北のこの惨状にいったいどれほどの責任を負えばいいのだろう。震災直後、5名の少年少女を想うだけで逃げ出したい気持ちになっていた自分に気づいて愕然とした。向き合わねば、どんな現実が起きていたとしても、自分がしてしまったことに向き合わねば。

今も考える。もしも私が、震災の10ヶ月前に修学旅行生に津波のレクチャーをした立場ではなく、被災地の学校教員だったらどうだったろう？津波が想定されていなかった地域の学校教員で、目の前に子供たちがいたら、私はちゃんと高台に誘導できたろうか。もう少し情報を集めてから最善の判断をしよう、という理由をつけて、その場にとどまったりしなかったらどうか。高台避難という判断を、他の教員に笑われるのではないかと躊躇したりしなかったらどうか。そして、こう感じることは私個人の強さ弱さだけの問題なのだろうか。

こんな経験をした私たちが、未来へ向けてできること。それは、「いかなる想定外でも失ってはならないものは何か」をみんなで話し合い、共有することだ。家族の命、子供たちの命、あなた自身のいのち。この基準をみんなが持てば、その時々で最良の選択ができるだろう。

小さな命たちが教えてくれた自分の弱さと、それをみんなで補い合って、大切な命を守るための方法。もう決して犠牲にしない。

(2015.3)

# 生かされて生きる ～東日本大震災の教訓

齋藤 幸男 ● 宮城県石巻西高等学校 校長

## 1. 顔の見える関係をつくってください

タテ社会の弱点を謙虚に見直し、お互いの顔が見える関係を作らないと災害対応は不可能です。

## 2. 子ども達の声に耳を傾けてください

子ども達は、自分が必要な人間だと感じ、決して一人ではないとわかったときに幸せを感じます。

## 3. 防災の思いをカタチにしてください。

さまざまな思いが見えるカタチにしなければ、防災の取り組みをしたことにはなりません。

## 4. マニュアルにない判断力が必要です。

マニュアルや訓練は大事です。しかし、それらを越えた判断をする覚悟を持っていてください。

## 5. 驕りを捨て自然と向き合ってください。

東日本大震災は、自然の恩恵を忘れてしまいがちな人間社会に対する大きな警鐘だったのです。

## 生き生かし生かされ生きるわが身には命の重さ尊かりけり

### 「ひとつ上」をめざす

- 「生徒を育てるのは生徒である」 生徒同士が高め合うと生涯支え合える友情が芽生える。
- 「教師を育てるのも生徒である」 生徒が本気になればなるほど教師は燃えるものである。
- 「学校をつくるのは生徒である」 自分の考えを実践する生徒が多くなると学校は変わる。

### 教育の力とは何か

教育の力とは生徒を幸せにする力である。

生徒が幸せを感じるのは必要とされていると感じたときである。

自分は決して一人ではないと感じたときに孤独から解放される。

生徒は誰かと共感できたときに人とつながることの意味を知る。

### 教育は決して無力ではなかった。

(2015.3)



宮城県石巻西高等学校  
慰霊碑

## おぼえていてくれたら

田んぼの苗が きれいに並んで  
そよ風にゆれる頃  
運動会の練習がはじまる

応援合戦で  
赤組の団長は白い牛乳を  
白組の団長はトマトジュースを  
一気に飲み干す  
おしまりのパフォーマンス

大歓声の中 かけぬけてゆく子どもたち

綱引きが始まると  
おばさんが飛び出して 声援を  
ソーランのかけ声 元気よく  
アンコールもあったりして  
子どもも 大人も 先生もみんな笑顔

青い空、緑の山、万国旗…

毎年ここで  
そんな運動会があったことを  
おぼえていてくれたらいいな



イラスト：斉藤 みお



名前を呼べば  
返事してくれそうだ

返事しているよ  
聞こえないだけ

## プールを見てきました

夏休みは毎日プール

プール掃除して、水入れたら  
たぶん、みんな遊びに来るよね

プールカードチェックして  
準備体操もしっかり  
日焼けした笑顔  
水しぶきと一緒にあがる歓声

こんな陽射しの日には  
プールサイドのかげろうみたいに  
思い出が揺れます



2014.7.27

震災後、ガレキや土で埋もれていて、  
唯一清掃していないのがプールでした。  
ここはまざれもなく、毎年子ども達が清掃して  
プール開きをして、水かけをして歓声をあげ  
一生懸命バタ足を練習した場所

震災後、「瓦礫」と呼ばれているものや  
雑草や土に埋もれている場所を前にして、  
ふと立ち尽くしてしまうことがあります。

それはかつてどんなもので、  
どんな場所で、どんな想いがあったのか…

来年の夏に水を入れたいなあ。  
そんなつぶやきをきっかけにして  
9月から、一人、また一人とスコップを手にし始めました。  
プールは大川小学校の中で  
「人力で復活させられる」唯一の場所かもしれません。  
たくさんの方々にご協力をいただき、  
ついに、プール（低学年用の小さい方）が底を見せました。

「やったー！」  
どこからか、子ども達の歓声が聞こえたような。

2014.11.3



# 教育行政は、大震災・子どもの犠牲と正対すべきである 大川小の災害事実を削除した宮城県教育委員会

高橋 達郎 ● 前宮城県教職員組合 執行委員長

## 1. 国と県の『東日本大震災における 学校等の対応等に関する調査』

私には、今も悔いがある。被災校への支援が十分にできなかったこと、特に大川小への支援が何もできなかったことだ。我が子を奪われた遺族の深い悲しみ、教え子を守ることができなかった教職員の深い悔い。それらの思いは想像に絶する。

2011年3月11日、私は白石市の小学校で4年生を担当していた。4月、6年担任となり、6月には、子どもたちと保護者で被災地・山元町に行き、被災状況をじかに見て被災者の話を伺った。8月には、職場の教職員で東松島・石巻・女川の被災地・被災校を視察した。休日には、被災地・被災校に足を運び、支援活動にも参加した。大川小には何度も足を運んだ。

翌年2012年4月、私は、宮城県教職員組合の執行委員長となった。私は、被災地の教職員組合の委員長として、まず、大震災・大津波による学校災害についてきちんとした認識を持ちたいと思った。そこで、文部科学省が2012年1月に被災3県（岩手・宮城・福島）の幼稚園と小中高校、特別支援校に行ったアンケート調査の報告書『平成23年度東日本大震災における学校等の対応等に関する調査』[2012年3月発表]（以下『文科省報告書』）を読んだ。さらに文科省調査の宮城県分のデータを文科省から提供を受けてまとめた『平成23年度東日本大震災における学校等の対応等に関する調査（宮城県分）』[2012年8月宮城県教育委員会（政令指定都市・仙台市分を除く）]（以下『宮城県報告書』）を読んだ。疑問がたくさんわき上がってきた。

## 2. 大川小の災害を『宮城県報告書』から 削除した県教委

『文科省報告書』『宮城県報告書』を読んで大きな疑問は、教育行政は犠牲となった子ども・教職員の命をどう受け止めているのか、ということである。2つの『報告書』は、「津波による人的被害」についての記述は、次の200字ほどの説明で終わっている。具体的な分析は全くない。

しかも、『文科省報告書』と『宮城県報告書』を比べて読むと、調査のまとめの文章は、数字の違いをのぞいて同じ文言だった。「津波による人的被害の状況」も『文科省報告書』と全く同じ文言であった。ただし、『宮城県報告書』は、1カ所違って、『文科省報告書』にある以下の太字波線（筆者）の部分が削除されていた。

下校中に津波に巻き込まれたとする回答が最も多く、保護者とともに自家用車で下校中に津波に巻き込まれ死亡した、保護者と下校中に巻き込まれて行方不明になった、降園中のスクールバスが津波に巻き込まれたなどが挙げられている。また、学校から小高い丘へ避難中に被災し死亡・行方不明となったケースや、身を寄せていた避難所の施設が津波にあったケースなどの報告もある。

また学校管理下外ではあるが、下校後、自宅にいて避難する際に津波に巻き込まれたというケースも多数報告されている。

（『文科省報告書』参考資料P16）

このケースが岩手か福島のケースであれば、宮城県分で削除したことは理解できる。『文科省報告書』参考資料16ページには、各学校のアンケート回答の記述がまとめられている。その中の【小学校】の中に「近くの小高い国道への避難途中、学校を出てすぐのところで津波に呑まれた。学校近辺での死者が多いが、外洋まで流された児童も

いる。不明者もいる。」との記述があった。私は、この状況は大川小であると思った。予想通り、その後宮城県教委が開示した文科省から提供を受けた学校名が記載されていない自由記述に上記の記述が入っていた。また、石巻市教委が開示した大川小の回答票にその回答は書かれていた。

しかし、宮城県教委は、「学校ごとの個票の提供は受けていない」として、私がこの文科省の文章を示して質問しても、「大川小のことかはわからない」と回答した。他の設問のまとめは、数字以外同じ文言でまとめられている『宮城県報告書』は、『文科省報告書』に記述されている大川小の災害を示した文言を削除したのである。宮城県教委はどの学校のことかは不明であるとしながらも、宮城県内の学校についての震災被害を調査した唯一の『宮城県報告書』から、大川小の災害の記述をわざわざ削除して発表したのである。これで大川小の災害、震災と向き合っていると言えるだろうか。これは、絶対に許されない。

### 3. 調査データを持っていない文科省、各学校の被災状況を把握していない県教委

岩手県教委は公表しているが、宮城県教委は大震災による各学校ごとの児童生徒の犠牲者数を今公表していない。その理由はわからない。それが宮城における学校被害を正しく認識する妨げになっている。一刻も早く県教委は学校ごとの犠牲者を公表すべきだ。

2012年7月、私は学校ごとの児童生徒・教職員・保護者の犠牲者数の開示請求を行った。その結果、児童生徒と教職員の学校ごとの犠牲者数が初めて明らかになった。しかし、犠牲となった状況については具体的には調査されていなかった。そこで、県教委に対し『文科省調査』に対する各学校からの回答票、文科省に対し仙台市を含む宮城県分の『調査データ』情報開示請求をおこなった。その結果、驚くべきことがわかった。

宮城県教委担当者の話。「宮城県教委として各学校の回答の個票は持っていない。どこの学校が

どうなったかは把握していない。今回の『報告書』（宮城県版）は、文科省からのデータの提供を受けてまとめたもの。よって、自由記述もどこの学校のことかはわからない。今後の対策と教訓をまとめるための傾向をつかめばいい。県教委として独自に調査はしていないし、今後の予定はない。」

文科省担当者の話。「今回の調査は業者委託なので、各学校のデータは委託業者が持っている。文科省にはデータとしても文書としても各学校のデータはない。よって、開示請求に対しては『文書不存在』として回答せざるをえない。」

具体的な場所と被災の状況、具体的な事実を把握しないで、どうして生きた教訓がつかめるのか？ さらに、2つの『報告書』には看過できない重大な欠陥があった。

- ①「津波による被害状況」を「浸水が予想されていた学校」と「実際に津波が到達した学校」に絞ったために、「予想」も「浸水」もなかった学校の児童生徒の死亡・行方不明を調査していない。
- ②死亡・行方不明者を「学校管理下や下校中」に絞ったために、学校管理下外（自宅や地域にいた）の児童生徒の死亡・行方不明者を調査していない。

### 4. 重大な欠陥のある『みやぎ学校安全基本指針』の改定を求める

そこで、私たち宮教組は、大震災で犠牲となった小中学生261名の状況を調査した。その結果は、教職員の管理下での犠牲74名（大川小73名、戸倉中1名）、下校中の犠牲者60名、自宅・地域での犠牲127名、（下校中・帰宅・地域の犠牲者のうち保護者引き渡し後74名）である。さらに判明している高校生・特別支援校の犠牲者92名を加えると、下校中の犠牲61名、自宅・地域での犠牲218名になると考えられる。（詳細は宮教組発行『子どもの「いのち」を守りぬくために』【第3集】拙稿参照）

つまり、今回の大災害を子どもの命を守る視点で見れば、①大川小の災害 ②下校中の災害 ③

自宅・地域での災害になる。ところが、『宮城県報告書』を基にして作成された『みやぎ学校安全基本指針』（以下『基本指針』）は、『宮城県報告書』の重大な欠陥を反映し、この3つのことが具体的数値と事実として明確に示されていないのである。大川小の災害と学校在学時以外での犠牲が多かった事実を客観的に示さないでどうして3・11大震災の学校教育の「課題」「教訓」と言えるだろうか。

『宮城県報告書』では、『文科省報告書』にあった大川小の事実を削除した。『基本指針』で大川小の災害が出てくるのは、県教育長の「はじめに」で触れているのみである。

県教委は、大川小の災害の事実とその問題点・教訓を、県教委として学校現場に明確に示していない。県教委の正式な文書・報告書からは、大川小の災害について知ることができないのである。

現在、県教委のHPに大川小学校事故検証委員会による「大川小学校事故検証報告書」がリンクされているだけである。県教委として大川小問題を担当し検証委員会を傍聴していたのは県教委義務教育課であり、『宮城県報告書』とそれにもとづく『基本指針』を作成したのは、学校防災担当の県教委・スポーツ健康課である。ここにも県教委の姿勢が示されている。

以上のことから、私は、宮城県教委（さらに文科省）に対して、大震災で犠牲となった子ども・教職員の「いのち」と遺族の思いに正対し、改めて今回の大災害で犠牲となった児童生徒の状況を調査し公表すること、さらにその調査結果と大川小の災害・教訓を明確にした『みやぎ学校安全基本指針』になるようにその改定を強く求めるものである。

(2015.3)

## 忘れようとしな

5年経って、世の中は変わろうとしています。  
何かが変わったかもしれないし、  
あの日から止まったままのような気もします。  
節目があるとすれば3.11の前と後、それだけ。

変わろうとすることは、  
忘れようとするのではなく  
忘れないことで、気づいたり、見直すことだと思っています。  
あの日の夕方は中学の制服を受け取りに行くはずでした。  
袖を通して喜ぶ姿、見たかったなあ。

今日もたくさんの方が訪れ、  
想いを寄せてくださいます。



2016.3.11

# 大川小学校で起きたことは知っていた でも『何が起きていたか』は知らなかった私たち

加藤 吉晴 ● 中津川市防災市民会議 代表

2011年3月11日の東日本大震災発生後の翌日には、中津川市を出発し、13日に石巻に立っていました。それ以降、2014年12月の石巻支援ボランティア活動まで30回を数えます。3年ほど前から、来るたびに大川小学校跡に立ち寄り、皆で手を合わせてきました。しかし、ついに大川小学校で何が問題になっていたかは、(お恥ずかしいことですが)知りませんでした。

私たちはいつものように、中津川市民持ち寄りの支援食糧物資をトラックに積んで、中津川からボランティアバスと並走させ、夜を徹して走り、12月20日早朝着いた石巻市内のあるお宅を会場にして、そこで聞いた講話でようやく知ることとなりました。

講師は、小さな命の意味を考える会代表の佐藤敏郎先生。耳を傾けたボランティアは15名。先生が語り続けられるその間、時間が止まったかようで、誰もが耳から入る音と、目に映る画に集中し、衝撃を受けた様子でした。知らなかった！ 今日まで、まるで知らないでいた！ そんなこととは知らずに毎回、大川小学校跡に行っていた！ そこが、そんな深刻なことになっていたとは！ それが、お話直後の偽らざる皆の感想でした。

「全ては、『子供たちの小さな命の問題』です。さらには『その命を守っていた命の問題』です。そのように感じさせていただきました。」

それらの命がまだあったとき、守られるべき小さな命はどのように守られていて、何が優先されていたのか、次に、その命が大量に消えるにいたったとき、その元は何だったのか、それが一番。

二番は、命が亡くなって後、周囲の数々の命ある者が命をどう悼んだかです。

二番は、一番の後に付随して出てきた問題ですが、(普段は隠れている)人間の根源的罪が、露呈したものでした。これまでの他の深刻事案と同様、時間のなかで、本質論からどんどん外れ、回避と欺瞞と虚偽、否定と修正の醜態を晒す態となりました。二番が混迷すると、一番も大きく影響されるだけでなく、一番はどんどん隅に押しやられていってしまいます。



そこで、一番の核心に迫るために、こんな問いかけを市民会議ニュースで作成しましたので、引用いたします。(市民会議ニュースは、中津川市内全戸回覧する本会の会報誌です)

## お聞きします

---

地震発生後、大川小学校の児童はいち早く校庭に出たものの、そこでじっとしていることに不安がっていた。その待機時間の長さが、結果として多数の犠牲者を出しました。なぜ、大川小学校の児童の安全を第一に守るべきほとんどの教員が、金縛りにあったかのように、そこから動こうとしなかったのか、なぜでしょう。

### あなたは、大川小学校の先生

- ①あなたは50分間も、なぜ校庭に居続けたのですか。  
何が優先だったのですか。
- ②その時あなたは、児童の安全確保と考え、  
最終的になぜ川に向かって避難を開始したのですか。

### あなたは、大川小学校の児童

- ③友だちと相談して、  
先生に「こうしよう」とみんなで言えるかな。

## お願い

---

ぜひ当事者になったつもりで、「私が~だったら」と考えてみましょう。  
それが、避難の安全意識を磨き、危険に直面した時に役に立つ訓練となります。  
それは、大川小学校で犠牲になった命に、お応えして生きることだと思うから。

人は誰でも、失敗しないように一生懸命努力する。  
しかし、時に失敗する。大きな失敗もする。  
それを見越して、失敗を減らすため、さらに人は努力する。  
そして、どうしていいかわからないことも少なくなるよう、いろいろと人は努力する。  
ノウハウ、テクニクとして。  
が、しかし、それで終わってないだろうか。

それでも失敗する。失敗はゼロにはできない。そのとき、つまり失敗したとき、どうするかという対策も考えておく必要がありそう。

対策というより知恵、知恵というより智恵、智恵というより精神のベース、精神のベースは良心、相対的でなく絶対的な良心、良心というより支え、揺らぎない自分の心の支え。精神的支柱で自分をさせていないと、犯した過ち、罪と向かい合えない。  
利害を超えて、裸になれない。

一方、和気藹々と「群れる力」と別に、群れを引っ張り「リードする力」の要件も、最終局面では、個人の精神的支柱に求めることができる。つまり、命の意味を少しでも知った者が、自らに課す命題として、日々、命から遠ざからなければ。

(2015.3)

# 子どもたちが見ている…を真ん中に

山田 真理子 ● 九州大谷短期大学名誉教授、子どもと保育研究所ぶろほ 所長

2011年の7月、私は初めて大川小学校地域を訪れました。津波で我が子を失った保護者の方々が集まって話し合いをされるというその貴重な場に同席させていただいたことが、今につながっています。発達に偏りのあった子どもの支援を通してその地域とつながり、今なお子どもたちの学習の支援や保護者の方々のケアを続けておられる佐藤秀明先生に同伴させていただいてのことでした。



そこで聞いた、震災直後からそれまでの話は想像を絶するものでしたが、その話し合い自体も私が想像していたものとは全く違っていました。(もちろん皆さんの心の内は想像できるものではなかったのですが、) そこに集っておられた保護者の皆さんは、悲しみを抱えながらも「空から見ている子どもたちに恥ずかしくない自分たちであろう」「あの子どもたちに話せる解決を見いだそう」との思いを、前向きに丁寧に語っておられた姿が深く印象に残っています。

その後、市や教育委員会とのやりとり、検証委員会の様子、中間報告、最終報告などの情報をいただきながら、また、九州から何度も足を運ばせていただきながら、子どもたちの命ではなく自分たちの立場を守ろうとする、日本の立場ある大人たちの姿に、悔しさと胸が詰まる思いでした。「なぜ、あのような悲劇が起こったか？」は、津波の予測ができたかできなかったかではなく、「なぜ(特に大人の)一人一人が自分(と子ども)の命を守る行動を、自分で判断できなかったか？」を丁寧に解きほぐしてゆくことからであり、その背景に日本社会の持っている様々な課題が見えてくるのでしょうか。

三年以上たってやっとテレビなども丁寧に取り上げるようになり、皆さんの思いは、大川小学校の悲劇を超えて、世界の子どもの幸せを守る大人の輪として、心ある人たちがつながってゆく鎖になっているように感じます。私も、時間をかけて、心を寄せて子どもたちを支え続けているたくさんの方と出会わせていただきました。皆さんが、「子どもたちが見ている…」を真ん中に、最初の想いと少しもぶれることなく歩み続けておられることを、遠くから変わらずに応援し続けてゆきたいと思います。

(2015.3)

# 「心の少年」

神山 典士 ● ノンフィクション作家

東京町田で、一人の伝説が生きている。

雀鬼、桜井章一。20年間無敗と言われた麻雀の鬼。

彼の周囲には、もう四半世紀以上、その姿を慕う若者たちが集っている。若者（といっても40代も増えてきたが）に対して、桜井はいつも言う。

「心に一人の少年を置け。迷うことがあったら、少年に聞け」と。

私はことあるごとにその言葉を思い出し、縁にしている。何が正しいのかもわからず、手さぐりで進まなければならないことの多いこの社会で、唯一それだけが心温まる道だ。

あの日、大川小学校の校庭で何が起きたのか。どんな会話が交わされ、どんな光景が展開されたのか。正しかったとか間違っていたとかいう大人の論理ではなく、あの校庭に佇んでいた少年の目に何が写っていたのか。

私たちはそのことを謙虚に、少しでも情報を持っている人に尋ねるべきだと思う。

そしてもうひと言、桜井には至言がある。

「心温かきは万能なり」

昔ジャングルで狼に育てられた（と思われる）少年が発見されたニュースがあった。人間たちが食べ物を与えたり寝床をつくったりしても、彼はけっしてそれに手を出そうとはしなかった。

ところが温かい湯を用意して、それにつからせた時、初めて心を開く態度を示したという。

同じ日本人であっても、立場が違うと言語が違ってしまう。異なる一人の神を崇めてしまった者同志は、殺し合いまで始めてしまう。

憎しみの連鎖からは何も生れない。勝者もなく、敗者もない。その心には、廃墟が広がるだけだ。

いまは人々の叡知を結集して「温かな湯」を想像しよう。互いに心を温めて、小さな命が囁く心の声に耳を傾けよう。

あなたの心の少年は、何を囁いていますか？

(2015.3)



# 大川小学校の大津波災害からの教訓

## ～あの日の大川小学校の校庭から学ぶもの～

大竹 正道 ● 気象予報士

「2011年3月11日。あの日、大川小学校の校庭で一体何があったのだろう。」岐阜県から家族を連れて訪れた大川小学校の校庭は、とても悲しく重たい風景でした。私は中学になる娘に問いかけました。「なぜ50分も時間があったのに、すぐ近くの山へ逃げられなかったのだろうか」と。すると娘はこう答えました。「こどもは素直だけど大人は素直じゃないから」と。この答えを聞いた途端、私はゾッとしました。素直であるがゆえ、直感的に山へ逃げようとも思うし、先生の指示に従おうとするのもまた、こども。山に逃げたいと思っても先生から校庭に居なさいと言われたら素直に従うしかないのかと。だとすると、こういった災害はどこにでも起こり得るのではないかと思ったのでした。

害（がい）は仏教が教える煩惱のひとつ。他者への思いやりの心が無い状態だそうです。災害と言う言葉を使いますが、この災害とは、人にも、地球へも思いやりの心が無い状態ではないかと考えるようになりました。

人への思いやりとは、学校現場で言うと、こどもへの思いやりだと思います。全てに優先されることは「こどもの命を守ること」。ご遺族のお話をお聞きしても、あの津波が襲って来るまでの約50分間、こどもの命が最優先にされたのか疑問が残ります。もし津波が来なかったらどうしよう。山に登って何かあったらどうしよう。誰が責任を取るのか等々、大人の利害関係や人間関係、事なかれ主義が優先されていたとしたなら、とても悲しいことです。ご遺族であり、教員でもある、佐藤敏郎先生は、こどもが命に見えるとおっしゃいます。いざとなったら先生に任せておきなさい。絶対に君たちを守るから。こんな想いが聞こえてきそうです。まさに、こどもの命を

真ん中においた思いやり。教師と生徒との信頼関係が必要に思います。

地球への思いやりとは、自然への畏敬の念、感謝の気持ちだと思います。自然破壊や地球温暖化防止への取組みに、まだまだ人類は及び腰です。一方で人類は地震、津波、台風などの自然現象の前には無力の存在です。これを防ぐことはできません。地球が生きている証しなのですから。我々人類は母なる地球から生み出され、そこに生かされている感謝の気持ちを、教員もこども達と一緒に考えて行くことが学校教育として必要ではないでしょうか。海からも山からも食べ物等々、大自然からの恩恵は絶大です。地球と共に生きている感覚、自然への畏敬の念を教え、1000年に1回の地球のくしゃみの時に、サッと逃げることを教えること。日頃からこの正しく恐れる防災教育が必要だと思います。

私は大川小学校の大津波災害を知れば知るほど、こどもの命を真ん中においた防災意識改革の重要性、人や地球への思いやりの心が大切と考えるようになりました。津波防災は決して巨大な防波堤を作ることはありません。所詮、どんなに頑丈な防波堤も大津波の前では砂の城のようなものなのです。地球へ感謝し共存するための、正しく恐れる知識を教え、行動すること、それが防災であり、災害から命を守ることだと考えています。そのために、地域の過去災害の歴史を共有し、日頃から災害時にどうすればよいか自主的に考える力を養うこと等が、学校の防災教育にとっても重要なことだと思います。無念にも命を落とした、こども達や先生方のためにも、このことを全国へ発信し、行動し続けて行きたいと思っています。

(2015.3)

## 大川の記憶

今日はシンサイミライ学校という交流学习に参加し  
県内外の中学、高校、大学生と一緒に  
長面地区と大川小学校に行きました

長面（ながつら：大川地区の東、海に面した地区）は  
何もかもなくなっていました

長面はお祭りが賑やかで、  
娘が6年生のときにせがまれて一緒に行きました  
震災前に長面に行ったのはそれが最後

初めてここに立ったような  
そんな錯覚に陥り  
案内をするはずが  
しばらく言葉が出ませんでした  
地盤沈下で至る所が冠水し  
どこに何があったのか思い出せなかったからです

夏休み  
自転車を走らせた海水浴場に続く道も  
同級生の家や  
店も、体育館も、電信柱も  
何もない  
瓦礫さえもない  
やがて誰も知らなくなるのだろうか  
ここに町並みがあったなんて

「記憶の中にしかない」風景だけど  
「記憶の中にさえない」風景にしたくない  
だから語り、伝えていく

ここにたしかにあった建物、営み、命…  
必死に思い出しながら  
話しました  
若者達は真剣に聞いてくれました  
今日で3年5ヶ月です



2014.8.11

# 大川小学校で起きたことから、 私たちは何を学ぶべきか

鈴木 宏輝 ● 高崎市学童保育連絡協議会 会長、高崎市PTA連合会 副会長

## あのとき、大川小学校で何が起こったのか ——

### 信じがたい数字

東日本大震災によって宮城県内で犠牲になった小学生は186人。そのうち実に74名がこの大川小学校での数字です。県内の実に4割が、1か所の学校での犠牲者数です。

まず言わなければならないのは、これだけの犠牲は、決して予想し得なかった津波のせいではない、という事です。ここだけが特異な地形だったのか？ 先生や地域から見放された学校だったのか？ 児童は何も判断のつかない特別な子ばかりだったのか？

大川小はごく普通の、どちらかと言えば地元  
に愛された、のどかで平和な学校だったはず  
です。「何故この大川小学校だけが」を考え  
なければ、今後の学校防災の意味がありません。



### 皆、分かっていた…？

大津波警報は聞こえていました。

ラジオもありました。

迎えに来た保護者は「津波が来るから逃げて」と叫んでいました。

広報車も、防災無線も、津波の危険を伝えていました。

スクールバスも待機していました。

11人もの教員が揃っていました。

走れば1、2分の場所には、簡単に登れる裏山がありました。

そして子どもたちは、「山に逃げよう」「ここにいたら死ぬ」と口にしていました。

自分から山に登った何人かは、先生に連れ戻されていました。

そのまま51分間も校庭に留まり、78人が黒い波に呑まれました。

「なぜ」「どうして」——この言葉ばかりが、この言葉だけが浮かびます。

## 逃げることをしなかった大川小だけの理由とは ——

校長は不在だった。しかし教頭、教務主任はいたので、普通に考えれば「逃げる」という簡単な判断はできたはず。その判断をも失くす、普通ではない要因が潜んでいたのではないかと…。

## 1. たった一人の判断行為

責任者には判断という権限がつきます。校長不在は不測の事態ではないのに、権限委譲がされていなかった。それはいわゆる管理体制が“事なかれ主義”になっていたのではないのでしょうか。権限だけ持ち去って、責任を預ける、そんな構図を見て取れます。

## 2. 「何かあったらどうするのか」

万が一の時…それは何が起こるか分からない意味なので、想定する時点で矛盾と言えます。

「何かあったら」まず危険と考えるのが、正しい行動です。もし「危険だ！」と叫ばれたら、大抵の人はそこから逃げるでしょう。想定することは、危険を忘れてしまいます。津波が来るかも知れない、という危機意識よりも、このままきっと安全だ、との想定が働いたのだと思います。

## 3. 先生は絶対的存在

当たり前かも知れませんが、でも自分の命のために必死な児童を見ても、行動を起こさなかった。危機意識は変わらなかった。実は先生たちも権限だけで、責任放棄だったんじゃないだろうか。

## これからの教訓とするために ——

子どもたちは必死になっていた。生きようとしていた。これこそ人の持つ最も大切な「学び」です。しかし残念ながらそれを教える側の先生には、「学び」がなかった。それでこんな大変なことが起きてしまった。しかし、先生だって、生きようとしていたはずなのに。

生きる力はどうやって学ぶのでしょうか。  
先生は誰から教わるのでしょうか。

子どもたちは守られなかった…。

子どもを守るには、どうしたら良いのでしょうか。家庭なら、親がその役目です。でもその親が世間から守られていなかったら…虐待がこれです。守る立場の人もまた、守られる必要があるのです。

先生に当てはめて考えます。

先生を守るのは、校長教頭といった上司や、教育委員会という組織が第一。それに保護者を含めた地域もそうです。これらは“大人”と括れそうです。先生も大人ですが、広義でのオトナです。果たして私たちオトナは先生を守っているのでしょうか？ 自分自身にも問答します。

このオトナを突き詰めると、どうやら国家に行き着きます。この国は国民を守ってくれているのでしょうか？ 大川小を考えると、つい国づくりを考えてしまいます。子どもたちは『未来』なのですから。その未来が「なぜ」「どうして」のままで失われていいはずがないのです。

私たちはオトナとして、子どもだけでなく、大人も守っていかなくてはならない。親も先生も国会議員も、みんなオトナにならなくちゃいけない。まずはこちらから守ってあげなければ、守ることはできない。最近それを忘れがちなのかも知れない、と感じます。



(2015.3)

# 教育の原点

瀬成田 実 ● 宮城県教職員組合 執行委員長

2014年3月9日、宮城県教職員組合など3団体が主催して「大震災と学校・教育を考えるつどい」を開催した。

そのシンポジウムで、Nさんは「教育そのものの原点である『命』という観点から、学校が命を根底とした教育を本当にこれまでやってきたかが問われている」と発言し、学力偏重主義を批判した。そして「(学校が)『学力向上』に特化していく中で、子どもの命の尊さや、可能性や、学びたいという気持ちをまったく無視して進んでいる。そういう人権破壊の状況が背後にあり、その一つとして大川小の問題が出てきたのではないか」と指摘し、被災地に限らない日本全体の教育の現状に警鐘を鳴らした。

東松島市の中学教師のSさんも、自らの“いのちの教育”実践を紹介する中で、「大川小の件があるから学校はちゃんと命を守らなくちゃいけない、ではない。普段から命をどれくらい大事にして命の教育をやっているかが問われているのではないか。その上に防災教育があるべきだ」と語った。

私たちは、震災文集を3集発行し、「大震災、学校の対応に関する教訓・課題チェックシート」も発行した。微力ではあるが、二度と悲劇を繰り返さないために力を尽くしてきたつもりである。私たちの意識の根っこにあるのは、NさんやSさんと同じように、「命」を守ることこそ教育の原点だということだ。

その意味で、「小さな命の意味を考える会」の取り組みに共感の意を表したい。

(2015.3)

(2017年現在：宮城県七ヶ浜町立向洋中学校 教諭)



浜畑 幹夫 ● 大川地区復興協議会 事務局長

子どもは地域の宝、地域の未来と言いますが、本当にそうだとしみじみ感じます。  
校庭から響く子ども達の歓声や歌声、大川小はいつも、地域と共にありました。  
私も卒業生（当時は大川第一小学校）として、PTAの一員として、地域社会の一員として深く関わってきました。  
思い出も数多くあり、大川小の犠牲については、残念でなりません。

あの事故にしっかり向き合おうという、小さな命の意味を考える会の活動に「異議なし」です。

地域はもちろん、多くの方々にバックアップしていただければと思います。

また、ふんばろう東日本プロジェクトの皆様には、この4年間、様々な支援をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

(2015.3)

---

古賀 正義 ● 中央大学 教授

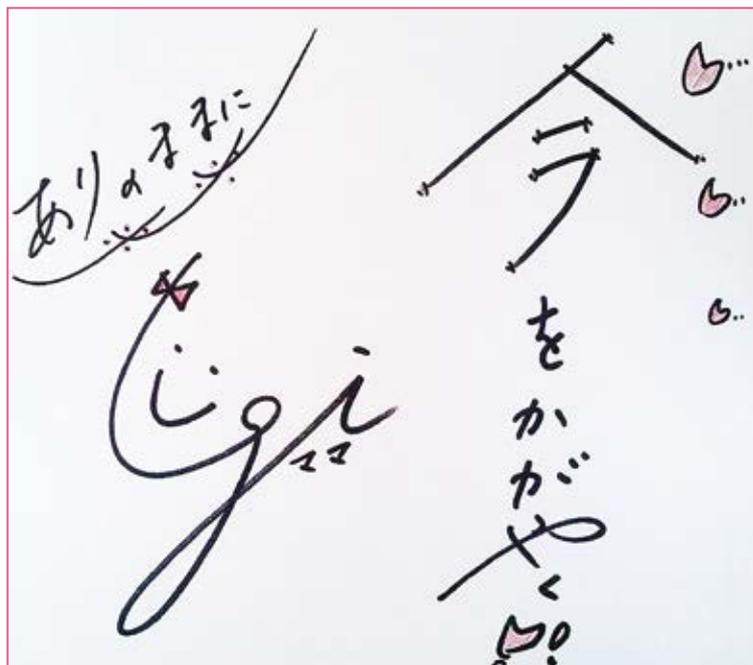
微力ながら、会の活動、応援いたします。「小さな命の意味を考える」ことが、日本社会全体にとっても必要なことと思います。

いま、世の中の人々は安定と保守を眼前に求めて進んでいますが、より大切なことは、人が幸せに生きる上での基盤を確立しておくことです。安全と安心がない社会では、だれが幸せに生きられるでしょうか。この会は、その入り口を作ってくれと期待しています。頑張ってください。

(2015.3)

---

尾木 直樹 ● 教育評論家



# 大川小学校を遺すことについての意見表明について

佐藤 秀明 ● ここねっと発達支援センター 東日本大震災緊急子どもサポートチーム 代表

## ■意見表明について～意見表明する6人について～

震災4年目の今年、6人の卒業生が、大川小学校を遺したいという自分の想いを伝える決心をしました。その経緯についてお伝えします。

## ■こどもの意見表明権～意見を表明することの意義～

学校とは…こどものいのちと権利を守り育むところです。ところが、大川小学校はこどものいのちを守れませんでした。そして大川小学校は、その時、子どもたちは「山に逃げよう」と懸命に訴えたにも関わらず、こどもの意見を聞き入れることもできませんでした。こどもの意見が受け入れられなかったこととなります。子どもたち自身が、気づき・考え・行動を起こそうとしたにもかかわらず、起きた出来事でした。

その後、ご遺族の悲しみに追い打ちをかけるような誠意のない対応に、多くの人たちが心を痛めたままで、いまだにそのダメージから回復できないでいます。その後も、聞き取り調査の記録を破棄してしまったり、子どもたちの証言を「こどもは記憶を間違えてしまうものだ」と言ったりする横柄な態度には、驚かされるばかりでした。子どもたちは、そんな心無い教育者の行いに返す言葉も、反論する機会すらありませんでした。だからこそ、被災した大川小学校を遺すことが大切だと感じた自分たちの想いや願いを意見として伝えることにしたのです。

## ■これまでの経緯～意見表明までの支援を通して～

2011年の10月から一期目の学習支援に取り組みました。この年の中学3年生たちは、そのほとんどが大川小学校で弟や妹を失っており、家族の悲しみの中で受験に向き合うことになりました。悔しさと、混乱と得体のしれない不安の中で、必死に自分の心を震わせて、歯を食いしばって受験を乗り越えようとする6人のメンタルケアとストレスマネジメントを併せ持った学習支援のプログラムを展開しました。ことば、味覚、自信の回復を図り、何とか全員志望高校合格を手にすることができました。

2012年の10月からは二期目の学習支援、震災当時は中学1年生…切り替えがうまくできずに、自信がなく、学習意欲を回復するまでに、失ったことばと味覚を取り戻すところからの支援を前年にもまして展開しました。この年のキーワードは、「覚悟」と「切り替え」、自分のよさを知り互いに認めあえる関係性の構築からの支援でした。仙台からの中学生も参加しての共同学習を提案しました。さらに、仙台での2泊3日の学習会にも参加し、二期生の4人の仲間は仙台の仲間とともに、この年も全員志望校合格でした。

2013年10月からの三期生たちは、震災当時大川小学校6年生が4人、(生き残った6年生は5人。そのうちの一人は県外に避難)多くの同級生を亡くして、3人の女の子と1人の男の子だけの学年になってしまいました。卒業式も亡くなった同級生とともに卒業したいという願いは退けられ、悔しい想いの卒業式を経験しています。そのダメージは、これまでの受験生として支援してきた子どもたちとは全く

違った対応が必要な4人でした。同級生を失い、生き残った自分を責め、心の苦しさや悲しさ、自責の念に苛む日々。はれものに触るような周囲の対応に自己の存在を否定的に捉えて、ただただ生きてきただけの半ば放心状態の4人でした。その実態を受けて我々の支援の在り方をよりていねいに、自己存在感・共感的理解・自己決定をキーワードにサポートを展開しました。その甲斐あって、三期生の3人は、仙台での2泊3日の学習会にも参加するまでに回復し、全員志望校に無事合格しました。

2014年10月からの四期生は2人。大川小学校当時5年生です。毎週週末に追波川仮設住宅の集会所で学習支援を開始しました。四期生の取り組みには、三期生の高校1年生たちが参加し、一緒に学習を始め現在に至っています。ここでのスタイルは、否定しないこと、強制しないこと、ていねいに向き合うことをキーワードに自分のよさを活かした学習支援のプログラムを意識して展開しています。



## ■校舎を母校として遺したいという想い

昨年の4月6日に仙台での一期生～四期生の5人による意見表明会をしました。全員に共通して言えることは、「大川小学校にはたくさんのともだちや先生たちとの思い出が残っている」こと、そしてあの場所は「自分たちの心が休まる場所」だということでした。さらには、多くの命が失われた場所だからこそ、二度とそのような悲劇を起こさないための教訓として、広島原爆ドームのように遺せることができたらという想いで意見表明でした。

今回もそのために必要な活動の在り方を模索しながら、より多くの方たちへ発信できたらという想いで壇上に上がったということになります。6人がそれぞれに自分のフィルターを通しての想いは変わることなく今回の意見表明に臨みました。昨年の4月以降、月一回仮設住宅の集会所に集まって、意見交換と情報交換を行っています。今課題になっているのは、遺したいという想いを行動に表わすには、署名活動を展開していくことができるかどうかということに今後の方向性を見出そうとしています。

## ■校舎を震災遺構として遺すことへの今後の展開

2015年3月14日に仙台で世界防災会議と世界防災ジュニア会議があります。この会議には、これまで活動を続けてきた5人がエントリーしました。ここでは、防災の観点から大川小学校を遺すことの意義を世界に向けて、どう発信できるかが重要になってきます。

また、6月には東京での支援コンサートに参加し、その場所で意見表明の機会を提供していただけることになりました。こどもたちの声を聴いて、応援してくださる方たちが増えてきています。そして、次なる行動を起こし始めてくださる方たちが現れるようになってきました。さらに地元では、大川復興協議会にこどもたちの意見を伝えることができました。

今後は、署名活動を前提にした意見の表明をどのように展開していくことができるのかを模索していくこととなります。私たちも出来る限り、こどもたちに必要な情報とニーズに応じた支援の在り方をこれまで以上に意識して展開していきたいと考えます。

(2015.3)

## ツリーが飾られました。

311Karatsの皆さんが、  
今年もツリーを飾って下さいました。  
いつもありがとうございます。

毎年恒例になりました。  
みんな喜んでるね、きっと。  
夜9時まで点灯しています。

2014.12.14



2016年



2011年



2012年



2013年



2014年



2015年

# 私にとっての大川小学校

会津 泉 ● 情報社会学研究者

2011年3月11日に大川小学校に起きたことは、いまの日本社会全体を象徴するものと思えてならない。当初「未曾有」「想定外」と言われた地震・津波だったが、本当にそうだったのか。たとえば1000年前の貞観地震・津波は記録にあり、広く一般にまでは知られていなかったとしても、古文書やボーリング調査によって、防災の専門家の、少なくとも一部には、あの日より前にわかっていた。

「宮城沖地震」が30年以内に起きる確率は99%で、津波の恐れも高いことは広く知られていた。行政も防災計画を見直し、マニュアルを改定し、避難訓練の内容を変えていたはずだった。

およそ2万人もの命が犠牲になった東日本大震災でも、74人の子供たちが、10人の教員とともに、津波に吞まれて貴い命を失ったのは、学校管理下では大川小学校がほぼ唯一の事例だった。

知られる限り、学校の管理＝責任のもとでこれだけの犠牲を出したのは、福島、宮城、岩手の三県で大川小ただ一校。釜石には「奇跡」と言われた学校があったが、事前の備えに加えて、子供たち自身がその場で下した判断が結果として命を救った。その釜石だけではなく、気仙沼も、陸前高田も、他の市町村も、教員がいて子供の命を救えなかったところはなかったという。現に石巻市でも、大川小以外はすべて助かっている。中には「偶然」もあったというが、ではなぜ大川小にはその「偶然」が良い方向に起きなかったのか。

我が子を失った親たちが「なぜうちの子が犠牲になったのか」と問うのは、ごく自然のことだ。「なぜ大川小だけが？」の問いは、重い。

しかし、石巻市をはじめ、宮城県も文科省など国も、行政側はこの当然の問いに向かいあってこなかった。都合の悪い真実は、隠されたままだ。

2年目の秋、たいした問題意識を持たないまま現場を訪れた私（たち）は、ご遺族の一人の方から「なぜここに来られたのですか」と問われた。

その場で語られた話は、報道により理解していたものとはかなり異なっていた。その後あらためてご遺族のもとに伺い、繰り返しお話を聞き、検証委員会や裁判を傍聴し、資料に目を通すにつれて、問題の重要性、ご遺族たちの苦しみの深さと事実・真実を明かすための活動の大きさが迫ってきた。

これは「他人事」なのか「自分事」なのか。東京に住む私は、孫が小学校や保育園に通う年代で、学校に災害があったら親より先に迎えに行く可能性も高い。

裁判に踏み切った人たちも違う選択をした人たちも、最愛の家族を失った辛さには変わりはない。「小さな命の意味」を考える活動、現場での「語り部」をはじめ大川地区の伝承活動。遺構のあり方を考える活動。あの日小学生の我が子をなくした親たちは、今みな働き盛りの世代で、仕事に生活にとっても大変な時期なのに。

地元の石巻や仙台、宮城の人たちは、なぜご遺族たちを支える活動をしないのかと黙って思っていたが、それより、まず自分が何かをしなければと考えるに至った。

「他人」ではなく「自分」のこととして、自分ができることを。宮城や東北に限らず、日本社会全体に、より広く・深く知らしめ、事実を明らかにし、同じことが再び繰り返されないためにどうすればいいのか、考え、実行すること。

同じ考えの仲間と「大川小学校問題研究会（仮）」を準備している。よろしければぜひ一緒に。

(2017.8)

# 子供たちの命を第一に考える 学校現場の構築を

中川 明 ● 復興支援ボランティア

2011年3月11日、東日本大震災から6年が経過した。

石巻市の大川小学校で発生した事故を知って以来、私の心の中でのその衝撃は今も続いている。なぜ、学校の先生が付いていながら、74人もの児童が津浪の犠牲とならなければならなかったのか。

さらに私を驚かせたのは、その後の石巻市の教育委員会（以下、「市教委」と記述する）の対応だ。

あの日から6年を経過しても、なお市教委はこの事故を検証する意思を示していない。

そもそも、防災上の安全の思想は、物作りにおける安全の思想と違いはないと考える。

物作りにおける安全の考え方の基本は、事故や不具合の発生しうる頻度や発生しうる大きさに対してそのリスクを評価し、対策を講じていく。そして、その製品の「残留リスク」ができるだけないように設計することが求められる。

防災の現場で、ハザードマップ上で危険区域に指定されているかどうかで「安全」の議論がなされている場合がある。しかし、私はその思想は明確に間違っていると考える。

ハザードマップで危険区域外としても、リスクがゼロのエリアは存在しないからだ。本来、危険区域外であっても「残留リスク」がどの程度なのか、その土地を客観的に評価しなければならないであろう。

一方、今回の大川小学校のように、一旦事故が発生すると、それは誰の責任かという決定論のような扱いに変わり、事故の責任者と被害者の間にかみ合わなくなってしまう場合がある。

事故には必ず原因がある。その原因を追及するのを阻むものは、法律違反に対する責任（過失責任）としてその原因が追及されるからにはほかならない。

市教委は、大川小学校の事故の学校側の過失を認めたくないものと理解するが、その姿は果たして、客観的に見てどう映るであろうか？

このような市教委の姿を見ていると、これまでの、原子力発電所におけるトラブル隠しなど、日本で発生した大きな事故後の組織の対応と非常に似ていると感じる。

アメリカの文化人類学者、ルース・ベネディクトは、著書「菊と刀」の中で、欧米は「罪の文化」であるのに対し、日本は「恥の文化」であると位置付けている。

欧米では、罪を神に告白して許しを受ける（罪の文化）というキリスト教の倫理的基盤にある。とりわけ、欧州では、安全の考え方の中に、「倫理を尽くして設計され、運用されるシステムであれば、免責が与えられるべきだ」というものがある。安全のルールへの要求に応え、かつ、結果として生ずる被害の救済要求に応えることが組織の責任者に求められるのだ。

他方、日本の場合、「恥」が主要な強制力となっている（恥の文化）ため、罪を告白しても心の荷が下りない。よく「正直者はばかをみる」というが、日本におけるこのような

組織内の発想はこれまでのあらゆる事故後の場面において発生し、肝心な事故の検証やその後の対策へ進めることを阻んでしまっているのではないかと思う。

学校は、児童・生徒への教育の場であると同時に、人を預かる組織である以上子供の命を守る「安全」に対する責任がある。これは、法律での定めの有無を議論する以前に、「自然に発生する責任」として捉えるべきだと考える。

そして、事故に対する検証について、欧州の安全の思想に照らせば、市教委は結果責任として真摯に対応しなければならない。

私は、どうか市教委が一步前進し、成熟した倫理基盤を構築出来ないものかと思う。論語に次の一節がある。

——義を見て為さざるは、勇無きなり。—— (\*)

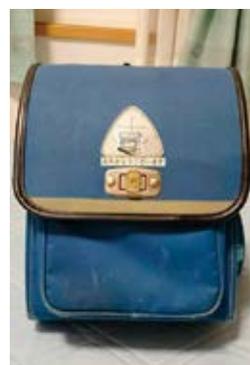
市教委のメンバーとて、学校現場を経験した先生である。私は、彼らの奥底にある人間・個としての善良の心を信じ、あの時みんなが51分間校庭に待機した本来の検証が行われる時を静かに待ちたいと思う。

(\*) こうするのが、あるいは、こういうのが人間として正しい道だと知りながら、自分の利益のため、または保身のために、あえてそうしない。それをわたしは勇気がない者という。

(2017.8)

## ランドセル

ガレキに埋もれた学校で  
見つかったランドセル  
泣きながら洗って  
4月からまた背負って  
6年間一緒だったランドセル  
母が書いてくれた名前  
中には教科書と  
ノートと  
みんなの写真  
思い出が詰まったランドセル



あの日、津波に飲まれながら助かった少年は、  
その時背負っていたランドセルを  
卒業まで背負い続けました。

2015.7.15

# At the school close to the river (川のそばの学校で)

Hatsume Kanaumi (金海 初芽) • Restoration Support Volunteer (復興支援ボランティア)

I'd like to share this tragic case with you if you are concerned about children's rights.

It happened in Japan, not a developing country, recently.

It was a really cute and beautiful school in a small town in the countryside.

All residents loved this school, students had enjoyed their peaceful school life until the disaster happened.

On the day the enormous earthquake happened in that area, all students and teachers congregated to the schoolyard right after .

Some families of students came to receive their kids at the gate. You should know that at that time, the teachers and families already knew about the tsunami alert. Kids who went back home with their families at this stage survived this disaster.

All other families believed that teachers guarded their kids by correct evacuation to the nearby mountain.

So, this school has a small mountain next the gym. The kids had a mushroom cultivation workshop on this mountain every March. The path of the mountain is an easy walk for everybody, include young kids and elderly people. All the people who knew this school had thought that students and teachers would go up this mountain if an earthquake happened.

In fact, residents and kids who evacuated to this mountain before the tsunami hit survived. Adjacent schools had evacuated to high places as well and guarded their kids.

But most teachers and students of this school never did that.

Of course, some students suggested evacuating to the mountain but the teachers didn't approve of this, so none of the students could evacuate .

50 minutes was wasted at this schoolyard.

And, the monstrous tsunami came there.

They only managed to evacuate 150m in the final minute.

70 kids, 10 teachers, and a school bus driver passed away. Four kids have not been found yet.

Only four kids and one teacher out of the people who were at the schoolyard when the tsunami hit survived.



Such a case has never occurred in any other Japanese school .

They knew about the tsunami alert and they could have evacuated to the mountain, but they never did that because they couldn't make a decision by themselves and didn't have any risk management skills or a valid manual and training.

The mission for saving lives of children had been left behind in.

This accident is a children's rights issue.

Article 3 of the Convention on the Rights of the Child says:

1. In all actions concerning children, whether undertaken by public or private social welfare institutions, courts of law, administrative authorities or legislative bodies, the best interests of the child shall be a primary consideration.
2. States Parties undertake to ensure the child such protection and care as is necessary for his or her well-being, taking into account the rights and duties of his or her parents, legal guardians, or other individuals legally responsible for him or her, and, to this end, shall take all appropriate legislative and administrative measures.

However, this school couldn't fulfill these obligations, and so far nobody has done so in this case.

I think we should clear up the reason in order to never repeat this sort of thing.

We should not cloud the facts, otherwise similar accidents will happen again someday in this country which has tons of disasters every year.

We have to overcome bureaucracy, immobilism, optimistic risk management and concealment in the school.

They are just enemies of children's rights.

Some of the bereaved families have sued the Board of Education and local government because nobody ever acknowledged their responsibility. Until the very end, the families wondered whether or not a lawsuit was the right way for them. But they had only that way.

I believe all people who are concerned about children's rights should pay attention to this lawsuit.

子どもの権利に関心のある人に、知っておいてほしいことがあります。  
それは途上国ではなく、日本で起こったことです。

小さな田舎町の、綺麗な学校での出来事でした。あの災害がくるまで、すべての住民に愛され、子どもたちの平和な学校生活の場だったところです。一帯を大地震が襲ったあの日、全生徒と教職員は校庭に避難しました。数組の家族が子どもを門まで迎えに来ました。もちろん、彼らも教職員も津波警報が出されていることを知っていました。この時点で家族とともに下校した子どもたちは助かっています。

他の家族は全員、教職員たちが子どもたちを連れて山に避難したものと信じていました。そう、この学校の体育館の隣には小さな山がありました。子どもたちはここで、毎年3月にシイタケ栽培の授業をうけていました。道は緩やかに歩きやすく、幼児やお年寄りにでも簡単に歩けるものでした。この学校を知る人は皆、地震があれば子どもも教師もこの山に登るものと思っていました。事実、津波がくる前にこの山に登った住民や子どもたちは助かっています。近隣の他校でも、高台に避難して事なきを得ています。

ところが、この学校のほとんどの教職員と生徒は、それをしませんでした。もちろん何人かの生徒は山への避難を提案しましたが、教師がそれを受け入れなかったために、誰もどこへも逃げられませんでした。50分間、校庭で無為に費やされました。そして、大津波がやって来ました。

最後の1分間に彼らが避難できたのはたった150メートル。70人の子どもたちと、10人の教職員、スクールバスの運転士が亡くなりました。4人の子どもたちはまだ見つかりません。津波がきたとき校庭にいた人のうち、助かったのはたった4人の子どもたちと、ひとりの教職員。こんなことが起こったのは、この学校ただ1校です。

彼らは津波警報を知っていたし、山に避難することもできたのに、それができなかったのは、彼らの誰にも決断能力がなく、危機管理能力もなく、有効なマニュアルもトレーニングも不足していたからです。子どもたちの命をまもるという使命は、なおざりにされていました。

これは子どもの権利にかかわる問題です。児童の権利に関する条約の第3条にはこう謳われています。

- 1 児童に関するすべての措置をとるに当たっては、公的若しくは私的な社会福祉施設、裁判所、行政当局又は立法機関のいずれによって行われるものであっても、児童の最善の利益が主として考慮されるものとする。
- 2 締約国は、児童の父母、法定保護者又は児童について法的に責任を有する他の者の権利及び義務を考慮に入れて、児童の福祉に必要な保護及び養護を確保することを約束し、このため、すべての適当な立法上及び行政上の措置をとる。

でも、この学校はこれらの義務を果たすことができず、今のところまだ誰もそうしていません。二度とこんなことを繰り返さないために、原因は明らかにされなくてはなりません。真実をうやむやにしてしまったら、毎年無数の災害に見舞われるこの国で、いつかまた同じことが起こります。官僚主義、事なかれ主義、危機管理意識の甘さや、学校における隠蔽主義は克服されなくてはなりません。これらは子どもの権利の敵なのです。

数組の遺族は教育委員会と地方自治体を相手取って訴訟を起こしました。彼らは最後まで、訴訟が正しい方法かどうか迷い続けていました。でも、彼らに他に方法はなかったのです。

子どもの権利に関心を持つすべての人々が、この訴訟に注目することを願います。

(2017.8)

# 多くの「なぜ」に向き合って

渡辺 実 ● 防災・危機管理ジャーナリスト

「行ってきますと言ったら、必ず大きな声で、ただいまと言うこと、それがボウサイです。」

宮城県石巻市の元教師佐藤敏郎さんは、子どもたちや教育関係者らに語り継いでいます。佐藤さんは、同市の大川小学校で、当時6年生の次女を失いました。「行ってきます」と家を出た後、「ただいま」と帰ってはこなかったのです。

学校管理下の児童を襲ったこの悲劇には今なお、多くの「なぜ」があります。児童が「山へ逃げっぺ」と言ったのに校庭の目の前の裏山へ逃げなかった▽津波が来ると分かっていて川に向かって逃げた▽石巻市教委は遺族に誠意ある対応や説明をしていない▽国主導でつくられた第三者委は事故の本質に迫れなかった▽唯一生存した教師は遺族に真実を話していない▽震災後に市教委が改訂した「防災の本」に大川小の悲劇が触れられていない…。

何が起き、なぜ犠牲になったのか、遺族は事実を知りたいだけなのです。被害児童の遺族23人は、宮城県と石巻市に損害賠償を求めて仙台地裁に提訴し、解明を法廷に託しました。

小さな命の意味を考える会の皆さんは、SNSやメディアを通じて多くの疑問を発信しています。学校管理下で起きたことですから、裁判の被告ではなく教育者として、知り得た事実を全て明らかにするべきです。それこそが、生存教諭が再起するためにもなると思うのです。

佐藤さんは話します。

「大川小で起きたことは二度と繰り返してはいけない。絶対にあってはいけない。絶対です。」

悲劇を繰り返さないために私たちは何をすべきなのか。

多くの「なぜ」に向き合うことから、答えを見いださなければなりません。

(2017.8 / 東京新聞2015年12月25日掲載の文章を再編集しました)



## 小さな命、小さな光

3.11以降にたくさんの大切なことに気づきました。  
そして、  
それは3.11以前にも大切なことだったことにも気づきました。  
失う前に気づくべきことです。  
一人でも多くの人に伝えたいです。  
会を作り、ホームページを立ち上げて約1年が経ちました。  
この間、いろんなことがありましたが、  
多くの方々に支えられ、様々なつながりもできました。  
ほんとうに感謝しています。

あの時、流された地域は夜になると街明かりがないので  
月や星がきれいでした。  
小さいけど、一生懸命輝こうとしている光があることを、  
ふだん私たちは気づいていない、  
最近そんなことを思います。

命は光です。

2014.12.30



# 小さな命がつながる LINK

命について考え、守るために活動している皆さんとの輪が広がっています  
この他の方々とのリンクも「小さな命の意味を考える会」WEBサイトでご紹介しています  
311chiisanainochi.org/?page\_id=769

## 地球のステージ e-stageone.org

世界の出来事を大画面の映像とシンクロする音楽によって感じようというコンサートステージを中心とした活動を行っている団体です。東日本大震災では直接津波の被害を受け被災しましたが直後より24時間開院し続け、緊急医療支援を行うとともに6月からは心のケアを地元名取市で展開しています。代表は精神科医桑山紀彦先生。

## NPOジェントルハート プロジェクト npo-ghp.or.jp

いじめ問題の解決を目指して、いじめ自死遺族等が2003年3月に設立したNPO法人です。いじめのない社会の実現のため、全国各地での講演会、展示会、勉強会やコンサート等の取組を通して、多くの人たちに「やさしい心」を伝えるための活動を行っています。

## 学校安全管理と 再発防止を考える会 shinnosuke0720.net

事故調査、原因究明、責任の所在は不明のまま風化されてしまうことで、幼稚園、保育園、学校、教育現場で子供の尊い命が失われているという現状が、残念ながら後を絶ちません。子供たちの命を守れるのは大人たちです。何ができるのか、何が必要なのか、再発防止に向けて事故と真摯に向き合い、未来へつなげていきたいと考えています。

## 七十七銀行女川支店 被災者家族会 ameblo.jp/coco5050ken

2011年3月11日、七十七銀行女川支店行員13人は二階建て支店屋上に避難しました。約30分後、津波は屋上まで到達し、12人が犠牲になりました。走れば1分で行けた町の指定避難場所高台があります。なぜ、屋上で待たなければならなかったのでしょうか。企業防災のあるべき方向を考えるサイトです。

## 浜名湖カッターボート 転覆事故を考える always-kana.jimdo.com

2010年に起きた事故について、真相を追い求めた遺族と支援者の記録。学校の危機管理の問題点を子どもを預かるすべての関係者に認識していただき、二度と学校の危機管理の希薄さによって、子どものいのちが奪われないよう、常に再発防止に向かって努力を重ねることを訴えているサイトです。

## 全国学校事故・事件を 語る会 katarukai.jimdo.com

「自分の子が、どうして?」「朝、『行ってきます』と元気よく出て行ったのに、なぜ?」——わが子が学校で事件や事故に遭ったとき、どうしてこんなことが起きたのか知りたい、それが保護者の共通の思いです。このような状況に陥っている皆さんを支援したい。これが会員全員の願いです。この願いに共感する弁護士や研究者などの専門家も参加しています。よりよい方向に向かうための対策をともに考え、探っていきましょう。

## あなたをママと呼びたくて…天から舞い降りた命

東日本大震災で犠牲になった石巻の日和幼稚園の園児を主人公にした絵本が出版されました。



## 3.11 日和幼稚園バス被災 その時何が…

石巻市日和幼稚園遺族

### 《事故の経緯》

石巻市にある日和幼稚園は、標高56mある日和山の  
中腹に位置し津波・地震による被害は全くありませんで  
した。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災で、高台  
にあった日和幼稚園は、巨大な地震を体感しながらも防  
災無線が鳴るなか、乗せなくていい私達の子供たちまで  
乗せ、バスを海辺に向けて出発させました。

私たちの子供は、本来であれば3便の3時7分発（内  
陸方面）のバスに乗るはずでした。

この日は、午後2時51分発の（海沿いの地域に住む  
子供達が乗る）2便目のバスで送迎する事が、朝の時点  
で既に決まっていたというのです。

地震発生でやむを得ず変更されたのではなく、この様  
な事が、私達保護者へは一切説明・承諾も得ず、日常的  
に行われていたという事を、震災後初めて知りました。

揺れが収まり、バスに乗せられていた子供たちは一旦  
園庭へと避難させられ、子供たちの中には、地震による  
恐怖などから泣いている子供もいました。

園庭には私たちの子供を含め、87人の子供が一時避  
難していて、その間職員8名の先生方は今後についての  
行動や役割などの「話し合い」すらせず、又、園長は防  
災無線を聞いていたにも関わらず、普段と変わる事のない  
送迎を指示したのです。

そして、誰一人としてこの指示をおかしいと思う職員  
はいませんでした。

午後3時前後には防災無線が鳴り響く中、幼稚園から  
バスを出発させたのです。

高台の幼稚園から低地へと津波の危険が高い海岸付近  
へとバスは走っていきました。

この時、すでに2便目の子供たちの親は、子供たちを  
迎えに幼稚園へと車を走らせていました。

一人の親は偶然にもバスを発見し、クラクションを鳴  
らし、バスを止め、自分の子供を降ろしてもらい、即座  
に避難しています。

もう一人の親も自宅とは違う場所で、子供を引き取り  
避難しました。

2便目の子供達5人の親は全員、子供を求め幼稚園や



門脇小学校にむかった為、誰一人として家にはいませんでした。

この様な状況下、バスはいつも通り一軒一軒まわり、最後の家の玄関の前に置手紙が貼られていたそうです。

「門脇小学校と日和幼稚園に行ってきます」と。

その置手紙を添乗員が見て、門脇小学校に向かうことになり、小学校に到着すると同時にバスの運転手に幼稚園から電話がありました。

運転手が門脇小学校にいる事を伝えると「そこにいるください」と言われ、門脇小学校で待機することになりました。

電話をかけた職員から、バスが門脇小学校にいると園長は聞き、その上で園長は職員2名を門脇小学校に向かわせました。

この時すでに園長は防災無線による大津波警報を知っており、このことを職員に告げずに、ただ「バスを戻せ！」との言葉だけで具体的な目的や指示を出さずに、向かわせたのです。

門脇小学校へは、幼稚園から徒歩数分、子供の足でも3～4分もあればたどりつける階段があります。

その階段を使い、門脇小学校の児童をはじめとする多くの近隣住民が避難しました。

門脇小学校に向かった職員2名は、その階段を降り、小学校に着き「バスを戻せますか？」と運転手に確認したところ、運転手は「大丈夫です」と答え、再びバスを出発させました。

この時、職員2名は、バスの中の子供達の様子を見ることもなく、また、確認や点呼することもなく、バスが門脇小学校を出る事すら見届けないまま、即座に階段を登り、幼稚園へと避難しているのです。

そして、門脇小学校から、再びバスが出発。

高台へ続く道が限られていた為、避難しようとしていた車で付近は渋滞しており、その間に津波が押し寄せ、バスが被災しました。

これにより、幼稚園バスが津波に巻き込まれ、尊い命が失われました。

バスの被災場所は、あと数メートルで津波被害を逃れた場所でした。

難を逃れた運転手は、幼稚園に助けを求めに行きましたが、幼稚園が最初にとった行動は運転手に着替えをさせ、休ませることで、園長には何も報告しませんでした。

バスの運転手が戻ってきた時点で、子供たちは亡くな

ったものと扱われ、園長はその後、状況の確認・子供達の捜索すらすることなく、迎えに来た保護者にも本当のことすら告げず事実を隠しました。

迎えに来た保護者は、正しい情報を得ることができず、自らの手で子供たちを探すチャンスすら奪われてしまったのです。

しばらくして、現場近くでは火の手があがり、被災現場付近に住む住民の方の証言によると夜中の12時ころまで子供たちの「助けて」との声が聞こえていて、どこにいるのかわからなかった。もし、幼稚園側がバスがそこにあることを教えてくれていれば助けられたかもしれないと話してくれました。

3日後、焼かれたバスのすぐ外で、両腕をあげ、みんなで抱き合うように重なっている子供達を、私たちが発見しました。

## 《遺族の思い》

私たち遺族は幼稚園にただ当たり前のことを当たり前にしてほしかったのです。

子ども達を落ち着かせ、守り、避難してほしい。事故を招いた原因は、日頃からのずさんな体制が招いた結果だと私たち遺族は思っております。

子ども達の命を、私たち親はその場に居る先生方に託すしかできないのです。

子どももそれに従う事しかできません。

大人の判断一つで、守れるはずの命も守れない命になることはあってはならないはずです。

私たち遺族は、無理難題を言っているのではありません。津波や火の中に飛び込んでまで助けて欲しいのではなく、ただただそれ以前の行動をとって欲しいのです。

どうかどうか、教育現場や保育現場に居るかたはどんな状況でも「子どもの命を最優先に」ということを強くお願いすると共に、そうあってほしいと願っております。

私たちの子どもたちには沢山の夢と希望がありました。早く自転車の補助輪を取りたい。早くランドセルを背負いたい。幼稚園の先生になりたい。ママみたいになりたい…。

これから沢山の事を経験して、みんなと一緒にキラキラと輝いた人生を送るはずでした。

私たち親は叶わなかった夢と希望を一生胸にしまい生きていかなくてははいけません。

最愛の子ども達が命と引き換えに問いかけている防災の在り方について皆様に考え直していただき、子どもたちの命が一番に守られる世の中になってほしいと強く願います。

# 七十七銀行女川支店 東日本大震災津波問題

田村 孝行 ● 七十七銀行女川支店被災者家族会

私たちは、東日本大震災発生から4年を迎えようとしています。「なぜ、七十七銀行だけが屋上避難なのか？」助かるはずの命だったと今もそう強く思うのです。

2011年3月11日、七十七銀行女川支店行員13人は2階建て支店屋上に逃げました。約30分後、津波は屋上まで到達し、12名が犠牲になり、8人が行方不明のままです。

走れば一分で行けた高台、堀切山があったのに。なぜ目の前の高台ではなく、屋上への避難指示が出されたのでしょうか。なぜ、屋上で待たなければならなかったのでしょうか。

あの尋常でないこの世の終わりかと思う長い強い揺れを感じていながら、正面入り口のカギを締め、その場にとどまることは、まるで本店から待機命令が出たかの様に、支店に留まる恐ろしさ、私たちには考えられません。支店は海から100m、屋上の高さ10m、目の前には国費を投下し、作られた標高50mの高台がありました。

銀行は、平成21年に屋上も避難場所に加えたという。

しかし行員が持っている災害時連絡カードには「屋上」の記載は無く、「堀切山」としかありません。「屋上」がマニュアルに加わっていなければ、支店長も迷うことなく、「堀切山」といったでしょう。そのプランは宮城県の実定調査の津波高を元にたてられたものだそうです。いったん津波が入り込めば、2倍、3倍とふくらむ、リアス式の津波の特徴、女川の立地条件を踏まえれば、ありえないものです。県の想定調査には、あくまでも想定とされていたものです。

しかも、有事の際には堀切山と屋上を並列とし、防災教育されていない現場の支店長一人に任せきりにしていたと言うのです。支店長に「堀切山」と言わせなかった銀行マニュアル「災害時緊急対応プラン」の罪は、大変、重いのです。取り返しのつかない結果です。

あの時、屋上から更に高さ3mの壁に張り付いた垂直のはしごで塔屋をのぼる行員たちの姿を堀切山から見ていた人、たくさんいます。塔屋の上はフェンスもなく強風が吹けば振り落とされそうな場所でした。あののはしごを想像も絶する恐怖の中よじのぼらなければなかったスカート姿の女性行員たち、あの寒さの中、最後に上着を脱ぎ捨てた男性行員、計り知れない恐怖、絶望、そして無念さを想像するたび、胸が詰まります。

しかし、銀行側は「やむを得ない」と一言でこの大惨事を自然災害のせいとし、私達遺族に向き合おうとしませんでした。私たちは、七十七銀行に対して職務中の銀行管理下の中、なぜこのような結果にならざるを得なかったのか。他の金融機関も避難するまで様々な行動をと



ったかもしれませんが。でも最終的には避難しています。なぜ、七十七銀行だけなのか、原因究明を追求していません。

企業は、「有事の時の危機管理、危機意識は自ら高めるもの」そうあるべきです。人命を預かる企業の責任として、最悪を想定し、最善の行動をとらなければならなかった。「やむを得ない」とする銀行の見解は企業倫理に欠落するものです。

企業はお客様や従業員の命を預かっているという社会的責任があります。行員家族の幸福も考えなければならぬはず。亡くなってしまった命にどう向き合うのか、それはお客様に対する向き合い方にも通じるものと思います。

いかなる場合があつたにせよ、命を落として良いという理由はありえない。想定外の自然災害だったから、仕方ないと言ってしまつてと同じ悲劇を繰り返してします。学校管理下や企業に勤める従業員などは、管理下の中にある以上上司の指示が無い限り勝手な行動を取れるもの

ではありません。リーダーと言われる人の責務は大変大きなものがあります。

今後も東南海地震など大きな地震が来ると想定されています。いつ起きるかわかりません。金品に縛られることない様な行動、とにかく逃げる、しっかりとした避難訓練、事前の準備が大切です。大きな災害の無い時期を過ごしていると、自分たちの居るところは大丈夫とか、自分たちにはそんなことは起きないだろうと思うことが、大きな危険要因になります。常日頃の心構えが大変大切なことと強く思います。

東日本大震災を教訓に次の災害に活かして欲しい、そして一人の犠牲者も出して欲しくない、悲しむ遺族をもつて欲しくないのです。東日本大震災を教訓に企業として命をどう守るのか一緒に考えて頂きたいのです。

私たちは、残された家族の使命として、この女川支店行員たちの大切な命を無駄にすることなく「命の大切さ」を全国、全世界の方に伝える活動「語り継ぐ命」を継続していきます。

## セウォル号事故 遺族の皆様へ

佐藤 敏郎 ● 小さな命の意味を考える会 代表

2014年4月、韓国でフェリーの沈没事故があり、修学旅行の高校生を含む多くの方が犠牲になりました。ほどなく、我が子を失った悲しみのあまり、遺族が自殺をしたという話を耳にし「何かを伝えなくては」と思い立ち、一気に書いたのがこの文章です。

とりあえず、韓国に知人がいるという方に渡したところ、数日後、ハンギョレ新聞社から連絡が来て、全文が掲載されることになりました。

その後、何度か遺族同士が会う機会があり、大川小にも来ていただきました。

\* \* \* \* \*

ニュースで、深い悲しみに沈んでいる皆様の様子を知りました。あまりに突然の悲しみと理不尽さに、自ら命を絶つ遺族もおられるという報道に、いたたまれず手紙を書いています。

私の国では、3年前の大津波で、たくさんの命が、木の葉のように流されて消えました。病気とも、戦争とも違います。何の前触れもない死です。

あの年は、毎週のように知人の葬儀があり、泣いて、落ち込んで、悔しがり、気がおかしくなりそうでした。今も、あの人はもういないんだと、ふと思い出し、何とも言えず胸が苦しくなります。何の疑問もなく続くと思っていた日常があの日から突然、目の前から消えました。

私の娘は学校で亡くなりました。石巻市立大川小学校の6年生、あと一週間で卒業式でした。学校の前の道路に、泥だらけになった小さな遺体が、次々に並べられていました。とても受け入れることなどできませんでした。今でもそうです。家にいると、娘の「ただいま」が聞こえそうな気がしてなりません。

我が子の名前を呼びながら、海に向かって泣き崩れる方々の映像を見て、とても他人事とは思いませんでした。こんな形で、家族を残して遠くに旅立たなければならぬなんて…。怖かったですよ、冷たかったですよ、どんなに生きたかったことですよ。

セウォル号では、危機に対する備えが不十分であったと聞きます。人の命を預かるはずの組織が、命を最優先にしていなかったということです。「命」よりも他ものを優先し、今日もどうせ大丈夫、少しぐらいならいいだろうという積み重ねが、船長をはじめとした乗組員の行動にも表れています。避難マニュアルも、救命ボートも、命を守るためのものではありませんでした。

大川小学校の災害への備えや避難マニュアルも実体のない、杜撰なものであったことが分かっています。そして、保護者や子どもたちが避難を訴えていたにもかかわらず、50分間校庭で動くことはありませんでした。

私は教員です。学校管理下で子どもを亡くした私の職場は、学校です。子どもたちは逃げたくても先生の指示を待っていました。先生の一言で、全員が助かっていたでしょう。体験したことのない揺れの後、大津波警報が鳴り響いていたあの状況で「逃げろ！」と、なぜ強く言えなかったのか、私はいつも自問しています。

セウォル号の事故で、未だに大川小学校での事故が教訓にもなっていないことが分かりました。3年以上も前の事故を通して、命を預かることの意味が見直されていれば、今回のような事故は防げたかもしれないと思います。船でも列車でも、災害でも、当たり前のことをしていれば守られるはずの命が失われる事故・事件は、けっしてあってはなりません。真に大切なことを、最優先に見つめ、語れる社会にしていかなければと強く思います。

命とはなんとはかないものでしょう。地球がちょっと身震いしただけで、破れてしまう薄い紙のようです。一方で、どんな大津波でも流されないものは、心だということを知りました。どんな状況にあっても人は希望を見つけ出せることを知りました。

瓦礫だらけだった町が少しずつ息を吹き返しています。心が折れなければ、希望を持ち続ければ、やがて光は見えてきます。莖が光を目指して伸びていくように。たとえゆっくりでも、たとえ一人でも、それに向かって進めばいいのだと思います。

あの子たちの犠牲が無駄になるかどうか、それが問われているのは生きている私たちです。小さな命たちを未来のために意味のあるものにしたい、それが、三年かかってようやく見つけた私にとってのかすかな光です。

他の国の見知らぬ者が、勝手なことを述べて、嫌な想いをされたのであれば申し訳ありません。関係ないだろう、と言われれば、たしかにそうです。でも、少なくとも私は、こうして書かずにはいられません。皆さんとは、何らかの形で手を携えていたらとも思っています。

もうすぐ娘の誕生日です。誕生日、お正月、クリスマス…、楽しい思い出の日が今年も巡ってきます。その度、胸を締め付けるこの悲しみは、娘の存在そのものです。だから、無理して乗り越えなくてもいいんだと、最近ようやく気づきました。私は、この悲しみとともに残りの人生を歩んでいきたいと思っています。

時折、夢に出てくる娘はいつも笑顔です。  
どうぞご自愛ください。

(2014年5月31日 ハンギョレ新聞掲載)

정겨워 오지

**일본 '쓰나미 참사' 유족이 '세월호 참사' 유족에게 보내는 편지**



동일본 대지진 때 탈출 일본 아버지가--

일본 동일본 대지진에서 탈출 일본 아버지가 세월호 유족에게 편지를 보내왔다.

이 글을 쓴 사토 도시호의 딸 미즈호(당시 12살)는 2011년 3월 11일 대지진 때 떨어진 오카와호중학교 참사로 목숨을 잃었다. 지진 뒤 거대 쓰나미가 미야기현의 오카와호중학교를 덮칠 때까지 대피할 시간이 50분이나 있었지만 학교 쪽이 격렬한 파란 조류를 하지 못해 전교생 108명 중 74명이 숨졌다. 아이들은 학교 뒷산으로 피난하려 했지만 "학교에 아무런"은 지시를 받고 대기하다 숨졌다. "가만히 있으라"는 어른들의 지시를 따르다 목숨을 잃은 세월호의 아이들처럼.

승진 오카와호중학교 학생들의 부모들은 지금 정부를 상대로 소송을 벌이고 있다. "작은 생명의 의미를 생각하는 모임을 꾸린 시토는 <정겨워 오지>에 이 편지를 권하여 세월호 유가족과 연대하고 싶다는 소망을 밝혔다.

---

**세월호 사고 유족 유가족회**

뉴스를 통해 깊은 슬픔에 빠져 있는 여러분의 소식을 알게 되었습니다.

저희 나라(일본)에서는 3년 전의 거대 쓰나미로 많은 목숨들이 나뒹날쳐를 앓아가 사려졌습니다. 어떤 애고도 없는 죽어었습니다. 지금도 '다 그 사람은 이제 없구나'라는 생각이 들어 마음이 아프고 할 수도 없을 만큼 가슴이 아파옵니다. 어떤 의심도 없이 계속할 것이라 믿었던 일상이 그날 갑자기 눈앞에서 사라졌습니다.



사토 도시호의 딸 미즈호의 사려를 밝히며 유족입니다.

저희 딸은 학교에서 숨을 거뒀습니다. 미야기현 미사노마키시의 오카와호중학교 6학

ハンギョレ新聞 WEBサイトより

# スマートサバイバープロジェクト

<http://sspj.jp>

一般社団法人Smart Survival Project（通称：スマートサバイバープロジェクト、略称：SSPJ）は、東日本大震災を通して得られた教訓や叡智を活かして、こどもたちの命を守り、社会に役立つ仕組みを広め、希望に溢れた未来を切り拓くプロジェクトを支援していきます。主な活動は「スマートサプライ」「スマートアクション」「スマートプロテクター」の3つで、現在は福岡市×イオングループ×SSPJ協働プロジェクト『備災のまちづくり@福岡』が始動しています。



## 主な活動

### スマートサプライ 「必要な人に、必要な支援を、必要な分だけ」届ける最新のシステム



「スマートサプライ」とは、東日本大震災の際に3000か所以上の避難所・仮設住宅・個人避難宅エリアを世界中から継続的にサポートすることを可能とした、ふんばろう東日本支援プロジェクトの物資支援方法をバージョンアップさせた仕組みです。現地が必要物資・サービスの聞き取りを行い、それをインターネット上のサイトに細かく掲載することで、遠方からでも、必要な人に必要な物を必要な分だけ届けることができます。必要な物や相手が明らかでないため、特定の物資等が過剰に集まることはなく、確実に役立っているという実感と手応えのある支援が可能となります。

### スマートサプライ活用実績

2015年5月以降、熊本地震、関東・東北豪雨災害、ネパール大震災等の際に、約150のプロジェクトで44,000点の支援を実現。熊本地震では企業や自治体とも連携し、物資支援のマッチングが行われました（2017年7月20日現在）。

2016年3月、スマートサプライが「第2回グッド減災賞」の最優秀グッド減災賞を受賞しました！



スマートサプライで支援するには  
■WEBサイト <http://smart-supply.org>

### スマートプロテクター 「やさしく、つよく、うつくしい」日常と非常をつなぐ防具の開発

スマートサバイバープロジェクトでは、「燃えない・濡れない・衝撃から守る」機能性と、「かっこいいから身に着けたい！」と思えるデザイン性を兼ね備えた、防災服・防災グッズの開発を行っています。日頃、好きだから身に着けているものが、いざという時に身を守るものであってほしい。そんな気持ちから作られる防具です。開発者はSSPJ副代表理事で、SEKAI NO OWARIの紅白歌合戦の衣装やジュピロ磐田の公式ウェアを手掛ける、ファッションブランドのプロデューサー・外所一石。



## スマートアクション 「あたらしい未来」を拓き、いのちを守る教育プログラム



スマートサバイバープロジェクトでは、特別講師を全国の学校、地方自治体等に派遣し、「自分と大切な人のいのちを守る」教育プログラムを、講演やワークショップ形式で提供。講師は東日本大震災経験者、防災について一定の教育知識を持つ者で、講演やワークショップ、イベント等で、これまでに270回、約30,000名を動員しています。講演後、参加者の皆様に「この話を家族や友人に伝えたい」「すぐ行動にうつしたい」と思っただけの心に響くコンテンツは、あたらしい未来を拓く防災教育として、多数のメディアに取り上げていただいています。

【メディア掲載】朝日新聞、日経新聞、毎日新聞、NHK、TBSテレビ、日本テレビなど

### 講演

#### 「小さな命の意味を考える」 講師：佐藤 敏郎 (SSPJ特別講師)

宮城県石巻出身、元中学校教諭。東日本大震災で当時大川小学校6年の次女を亡くす。講演では、あの日起きたことに、子ども達はどのように向き合い生きてきたのか、どのような未来に向かおうとしているのか、そして、私たち大人の役割について、事例をあげて考察します。全国どこでも「被災地」になり得る時代です。また、私たちの前に立ちはだかるのは自然災害だけではありません。21世紀を生き抜くために、3.11をどのような学びに変えていくべきなのかを考えます。



### ワークショップ

#### 「防災ママカフェ」 講師：かもん まゆ (SSPJ特別講師)

東日本大震災、熊本地震を経験した乳幼児ママの声をまとめた、ママのための防災ブック「その時ママがすることは？」(1冊200円でご購入可能)や、映像、スライドを使い、被災したママたちのリアルな経験と子どもを守る知恵を伝える防災講座。お子さんの同席もちろんOK！NHK教育「すくすく子育て」にも出演した講師が、「ママが知れば、備えれば、未来は変わる」を合言葉に、私たちができる「備え」をわかりやすくお伝えします。



### 冊子提供

#### 「津波から命を守るために 大川小学校の教訓に学ぶQ&A」

著者：西條 剛央 (スマートサバイバープロジェクト代表理事)

推薦：片田 敏孝 (群馬大学広域首都圏防災研究センター長)

再びやってくる津波により同じ悲劇が起きないように、74名の児童が死亡、行方不明となった大川小学校に関する研究をもとに作成した冊子です。これまで22万人以上の方々に無償で配布させていただきました(2018年現在は、1冊200円でご購入いただいています)。



講師派遣に関するお問い合わせ・お申し込みは

■WEBサイト <http://sspj.jp/lecturer> ■Eメール [info@sspj.jp](mailto:info@sspj.jp)

## ご支援のお願い



スマートサバイバープロジェクトでは、私共の活動をご支援いただける個人サポーター(賛助会員)を募集しております(1口1,000円/月~)。みなさまからのご支援は、私たちの活動をより多くの方々を知っていただき、持続可能な運営体制を築くために、大切にさせていただきまます。

■スマートサプライでの個人サポーターお申し込みは

WEBサイト <https://smart-supply.org/#/sspj>

■お問い合わせは [member@sspj.jp](mailto:member@sspj.jp)



# 小さな命の意味を考える会

311chiisanainochi.org

小さな命の意味を考える会は、大川小学校で起きたことについての検証、伝承、そして想いを多くの人と共有する目的で作られた任意団体です。2013年11月、ホームページを作成し、当時行われていた「大川小事故検証委員会」に意見書を提出したのが活動の始まりです。

国内外から寄せられる様々な情報やメッセージもふまえ、主にWEBサイト等による発信、勉強会や座談会の開催、他団体との交流等の活動を続けています。求められれば現地の案内もさせていただいています。

## 第3回 国連防災世界会議 一点の曇りもなく

2015年3月14日、第3回国連防災世界会議の一環としてパブリックフォーラム「小さな命の意味を考える」を開催しました。

(主催：NPO法人 KIDS NOW JAPAN / 会場：仙台市市民活動サポートセンター)

来場者は「多くても100人程度」と考え準備をしていましたが、300人を超える方々に来場いただきました。

開始20分前に立ち見で会場が溢れました。

準備中、次々に入ってくる人達を見て「信じられない」という思いと同時に、もしかしたら、この中にまじって、子ども達も来ているんじゃないかと不思議な気持ちになりました。

こんな感想をいただきました。

フォーラムでの報告は、一点の曇りもなく「大川小の悲劇」の本質を語ってくれました。

あの日の校庭に、あの命たちに、どれだけ「曇りもなく」向き合えているかどうか。

ほんとうに守るべきものに「曇りなく」向き合えているかどうか。

たくさんの方においでいただき感謝しています。

これは始まりなのだと思います。



スマートサバイバープロジェクト代表理事 西條剛央と、小さな命の意味を考える会代表 佐藤敏郎が考察を述べた後、東京大学の瀬藤一起先生、富山大学の林衛先生よりコメントをいただきました。



西條 剛央



佐藤 敏郎



東京大学  
地震研究所 教授  
瀬藤 一起 先生



富山大学  
人間発達科学部 准教授  
林 衛 先生



## 勉強会 誰にとっても大切なこととして

2017年に入り、あの日何が起きたのか、何が問題なのかを知りたいという声をうけ、勉強会を開催しています。毎回、県内外から多くの皆さんが参加しています。



立場によって見方も変わってくる部分もあるでしょう。相手を気遣うあまり、言いにくいこともあるでしょう。これまでも感情のコントロールができずバランスを欠くこともありましたが、意図しない形で相手に伝わることもありました。それだけに、いろんな立場を超えて一緒に考えようという形が、これまでできずうでなかなかできませんでしたが、6年が過ぎてようやくこの場が持てました。

## 語り部ガイドと勉強会について

旧大川小学校校舎の外観はいつでも見学していただけますが、現地の有志による「語り部ガイド」を定期的  
に実施しています（1～2カ月に一度／大川伝承の会主催）。また、小さな命の意味を考える会主催の勉強会等  
も不定期に開催しています。どちらも、小さな命の意味を考える会のFacebookで開催日などをご案内してい  
ますので、ご興味ある方はこちらをご確認ください。 [www.facebook.com/chiisana311](http://www.facebook.com/chiisana311)

## ご支援のお願い

小さな命の意味を考える会の活動を広め、サポートするために、スマートサバイバープロジェクトでは、みな  
さまからのご支援をお願いしております（1口200円～）。ご寄付は、本冊子の印刷費、制作費、発送諸費用や、  
講演等で全国に講師を派遣する際の費用補助などに、大切に使用させていただきます。

### ■小さな命の意味を考える会をスマートサプライで支援するには

WEBサイト <https://smart-supply.org/#/sspj>

### ■口座へのお振込は

りそな銀行 神楽坂支店 普1649694 一般社団法人Smart Survival Project 代表理事西條剛央  
(イッパンシャダンハウジンスマートサバイバープロジェクトダイヒョウリジサイジョウタケオ)

### ■お問い合わせは [info@sspj.jp](mailto:info@sspj.jp)



## 子どもの声

あの日の校庭で「山に逃げよう」と訴える子ども達がありました。  
大人は、ほんとうに大切なことが、見えなくなることがあります。  
余計なしがらみで曇ってしまうのです。

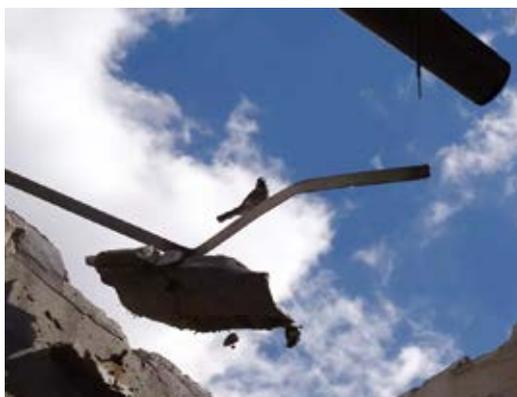
あの日の子ども達とダブります。  
ほんとうに大切なことにまっすぐ向かう子どもの声。  
いろんな事情や想いがあるのは当然ですが、  
まずは耳を傾ける場ができた。  
4年間で、ほんの少しですが進んだことです。

遺す、遺さないの前に、熟議ができるかどうか。  
きちんとした対話を通して意思決定ができるかどうか。  
あの日の校庭がスタートラインです。



---

2015年3月8日校舎の保存・解体を考える大川地区の全体説明会に、  
大川小の卒業生が勇気を振り絞って出席し、意見を述べました。  
中高生達は何度も話し合いを繰り返し、発表の場に臨みました。



---

## 小さな命の意味を考える

2015年3月14日 第1版第1刷発行

2018年5月10日 第3版第3刷発行

編集・発行 ● 小さな命の意味を考える会／一般社団法人 Smart Survival Project

表紙イラスト ● 斉藤 みお 編集協力・デザイン ● 三富 とくほ

---

### 小さな命の意味を考える会

代表：佐藤 敏郎

E-mail：311chiisanainochi@gmail.com

311chiisanainochi.org www.facebook.com/chiisana311

一般社団法人 Smart Survival Project (通称：スマートサバイバープロジェクト、略称：SSPJ)

代表理事：西條 剛央 (ふんばろう東日本支援プロジェクト元代表、早稲田大学大学院 (MBA) 客員准教授)

〒106-0031 東京都港区西麻布3-24-22 プラザ西麻布3F TEL: 050-3825-2165

sspj.jp www.facebook.com/smart.survival.pj

---

本冊子は、2015年3月14日に開催された第3回国連防災世界会議のパブリックフォーラム「小さな命の意味を考える」のために作成したものを元に、加筆改訂しております。たくさんの方のご支援・ご協力によって制作・発行いたしました。心から感謝申し上げます。

本冊子のPDF形式のデータは、以下のホームページアドレスからダウンロードしていただけます。

■ 小さな命の意味を考える会 [311chiisanainochi.org/?page\\_id=1611](http://311chiisanainochi.org/?page_id=1611)

■ スマートサバイバープロジェクト <http://sspj.jp/brochure-chiisanainochi>